

福岡市中部地区埋蔵文化財調査報告

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第111集

1984

福岡市教育委員会

五十川遺跡



1984

8/24

福岡市教育委員会





五十川遺跡群 第3次調査 西半部調査区

序 文

時代の先を洞察しようとする時、人は過去から学び、現代に照合しようとするのが一般的な姿のようです。過去の資料がより事実に近ければ近い程その価値は高いものと考えます。そのような意味に於いてより実証的な史料である埋蔵文化財の成果は各界の注目を集めるともであると信じるものです。

今回報告する五十川と井尻美松町の遺跡は弥生時代から古墳時代の人々の生活の場を示し興味あるところです。この報告書が学校教育、社会教育、そして各研究機関にて御活用頂ければ幸いと思います。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、教育委員会の立場に御理解を頂き、御協力を給った進藤哲男氏と金子久吉氏に対し心よりお礼を申し上げる次第です。

昭和59年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

- 本報告書は福岡市教育委員会が国庫補助を受けて1983年度に実施した福岡市中部地区の民間宅地造成にともなう緊急発掘調査報告である。
- 遺構の呼称は全て記号化して番号を付した。溝→D、土塁→K、住居址→C、井戸→Eとし、例えばSC01などと標示する。
- 本書の執筆は五十川遺跡を下村・横山、井尻美松町遺跡を小林が分担した。
また編集は下村・小林・横山で協同して行なった。

本文目次

序	
I はじめ	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の記録	5
調査地点の概要	5
1 弥生時代	6
2 占墳時代	8
(1) 住居址	8
(2) 井戸址	21
(3) 土 塹	28
3 奈良時代	33
(1) 挖立柱建物	33
(2) 溝状遺構	35
4 中世期	36
(1) 挖立柱建物	36
(2) 溝状遺構	38
IV まとめ	39

挿図目次

第1図	五十川遺跡周辺遺跡分布図（1／2.5万）	2
2図	五十川遺跡群位置図（1／4000）	4
3図	遺構全体図（1／100）（折込み）	
4図	弥生時代遺構分布図（1／200）	6
5図	S C09住居址実測図（1／50）	7
6図	S C09住居址出土遺物実測図（1／3）	7
7図	S C01住居址実測図（1／50）	8
8図	S C01住居址出土遺物実測図（1／3）	9
9図	S C02・03住居址実測図（1／50）	10
10図	S C02・03住居址出土遺物実測図（1／3）	11
11図	S C04住居址内方形七塗実測図（1／20）	11
12図	S C04住居址実測図（1／50）	12
13図	S C04住居址出土遺物実測図（1／3）	13
14図	S C05住居址実測図（1／50）	14
15図	S C06住居址実測図（1／50）	15
16図	S C06住居址出土遺物実測図（1／3）	15
17図	S C07住居址実測図（1／50）	16
18図	S C07住居址出土遺物実測図（1／3）	17
19図	S C08住居址実測図（1／50）	18
20図	S C08住居址出土遺物実測図（1／3）	18
21図	S C10住居址実測図（1／50）	19
22図	S C12住居址実測図（1／50）	19
23図	S C13住居址実測図（1／50）	20
24図	S C13住居址出土遺物実測図（1／3）	21
25図	S E01井戸址実測図（1／30）	21
26図	S E01井戸址出土遺物実測図（1／3）	22
27図	S E02井戸址実測図（1／30）	23
28図	S E03井戸址実測図（1／30）	23
29図	S E03出土遺物実測図（1／3）	24
30図	S E04井戸址実測図（1／30）	24

第31図	S E04井戸址出土遺物実測図（1／3）	25
32図	S E05井戸址実測図（1／30）	26
33図	S E05井戸址出土遺物実測図（1／3）	27
34図	S E06井戸址実測図（1／30）	27
35図	S E06井戸址出土遺物実測図（1／3）	28
36図	S K01土塁実測図（1／20）	28
37図	S K01土塁出土遺物実測図（1／3）	29
38図	井戸址断面図	30
39図	古墳時代遺構分布図－1（1／200）	31
40図	古墳時代遺構分布図－2（1／200）	32
41図	奈良時代遺構分布図（1／200）	33
42図	S B01掘立柱建物実測図（1／50）	34
43図	S B02掘立柱建物実測図（1／50）	35
44図	S D04溝出土遺物実測図（1／3）	36
45図	中世期遺構分布図（1／200）	37
46図	S B03掘立柱建物実測図（1／50）	37
47図	S B04掘立柱建物実測図（1／50）	38

付 図

付図1 五十川遺跡群第3次調査地点図（1／300）

図版目次

- 図版 1 1 調査区東半部遺構出土状況
2 同西半部遺構出土状況
- 図版 2 1 調査区西半部遺構全景
2 S C01住居址出土状況
- 図版 3 1 S C02・03・06住居址出土状況
2 S C02住居址カマド出土状況
- 図版 4 1 S C04住居址出土状況
2 同住居址内方形竪穴出土状況
- 図版 5 1 S C05住居址出土状況
2 S C04・06・07・08・11住居址出土状況
- 図版 6 1 S C07住居址カマド出土状況
2 S C08住居址カマド出土状況
- 図版 7 1 S C09住居址出土状況
2 S C12住居址出土状況
- 図版 8 1 S C13住居址出土状況
2 同住居址カマド出土状況
- 図版 9 1 S E01井戸址出土状況
2 S E02井戸址出土状況
- 図版10 1 S E03井戸址出土状況
2 S E04井戸址出土状況
- 図版11 1 S E05井戸址出土状況
2 S E06井戸址出土状況
- 図版12 1 S K01上塙出土状況
2 S B03・04掘立柱建物出土状況
- 図版13 出土遺物(1)
- 図版14 出土遺物(2)
- 図版15 出土遺物(3)

I はじめに

1 調査に至る経過

1982年7月、南区五下川2丁目99、100、569～3番地内における宅地開発の計画が文化課に提出され、当該地内の埋蔵文化財の有無の確認が事前に必要となった。文化課では原凶者・工事施行者と協議の上既設の施設一切が除去された同年8月18日に試掘調査を実施した。この結果当該地は古墳時代後期の堅穴住居址および柱穴群が重複密集して残存する同時代の集落址などの一部をなすことが判り、現状保存を含めた調査協議の結果、住宅建設によって失なわれるこれらの遺構についてやむなく本調査を実施することになり、1983（昭和58年）年4月25日より本調査を始めた。

2 調査の組織

調査主体

福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第二係

事務担当

折尾学（係長）、古藤国生

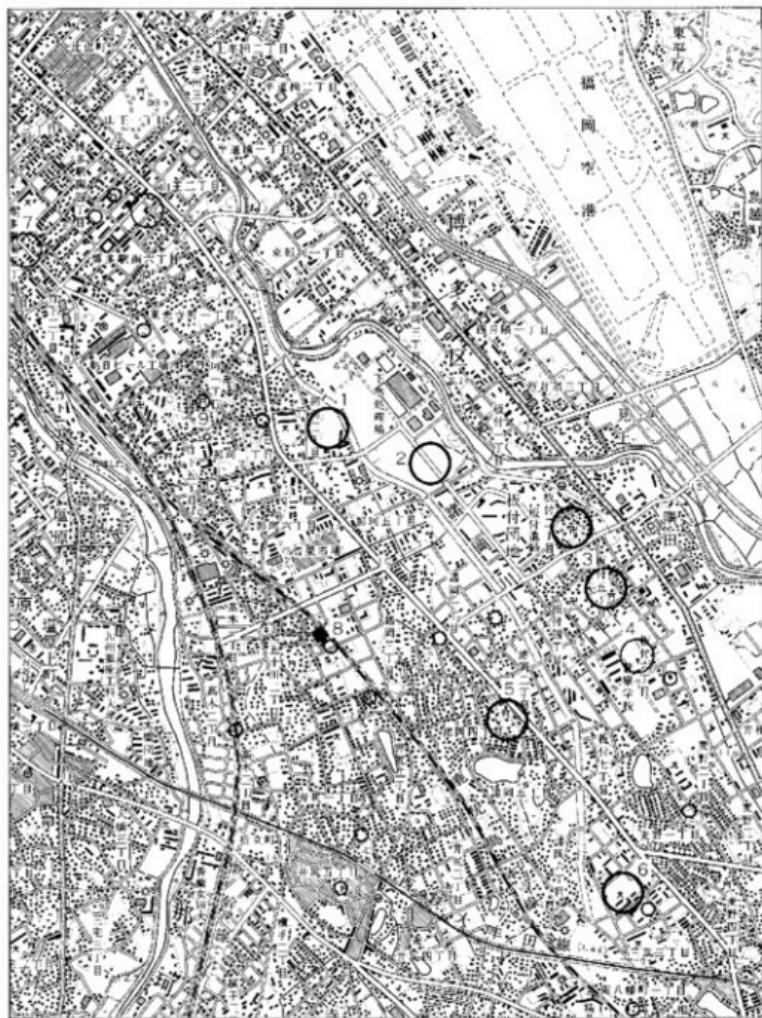
調査担当

横山邦継、下村智

調査・整理作業

秋木則子、井手伸子、大神嘉彦、上方高弘、川崎道子、木山ツネエ、進藤君子、
進藤ナカノ、須山礼子、末永とし子、谷エミ子、谷照子、谷ヨキ、谷ツチ子、
徳永伸子、富永金子、富永千里、西本スミ、花畠照子、深沢美代子、別府香代子、
真鍋ミワ、松永武士、溝口博子、村上エミカ、村上恵美子、村上キヨエ、矢野隆
子、山根キミエ、杠真知子

なお今回の発掘調査にあたっては地主進藤哲男および大祥建設株式会社池田昌登の諸氏には多くの協力・援助をうけたことを記して深く感謝する次第である。



第一圖 五十川遺跡周辺遺跡分布図 (1/25000)

1 那珂須ツサ遺跡、2 那珂君休・久平遺跡、3 板付遺跡、4 警察学校内遺跡、5 指摘遺跡、
6 三須遺跡、7 比志遺跡、8 五十川遺跡(黒丸一今向測定)、9 斯界八幡古墳(前方後円墳)

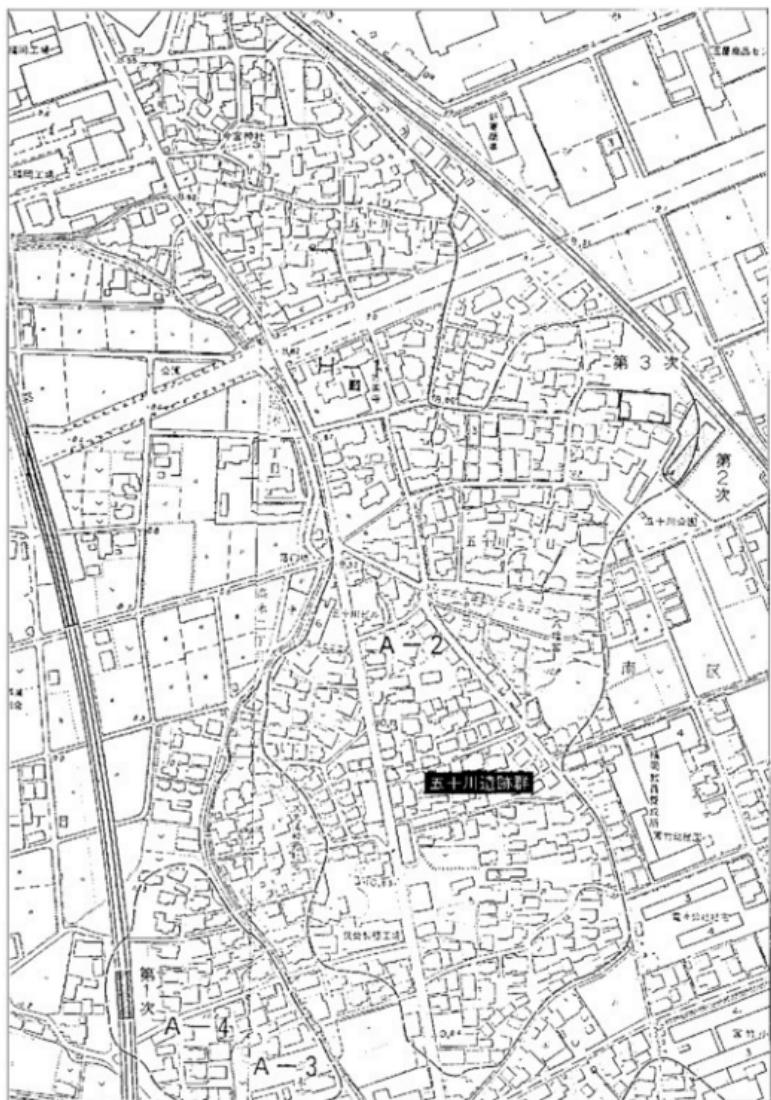
II 遺跡の立地と環境

立地 五十川遺跡群は那珂川右岸にひろがる中位丘陵（Aso-IV火成流）にあたる標高9.5m～10mの那珂丘陵の南東部縁に位置する。丘陵西側は那珂川の氾濫侵食によって崖縁をなし、東縁は緩やかに沖積地へと移行している。

周辺の歴史的環境（第1図） 五十川遺跡群周辺では北側に緩く傾斜しながら伸びる那珂丘陵上や東側に対峙する同じ中位丘陵である板付・安野丘陵やこれらの周辺の沖積地などで今回検出された古墳時代に相当する生活址および生産址・墓地の遺跡分布は非常に多いといえる。（註1）生活址では板付遺跡（3）の北端で竪穴住居址や土器を多量に含む土塙（紀元4世紀末～5世紀初）群が見付ったのをはじめ南側丘陵の南端（D・E 9地点）で土器を包含する土塙群やこれの更に南方の沖積地内（D 10a地点）で溝状遺構より多量の土器を含む土塙・窓・高塙・小型丸底壺や農耕具が出土している。那珂丘陵では比恵遺跡群（7）の第4次調査で溝（註2）・遺構、第5次調査で前期に相当する竪穴住居址20数軒が検出された。第6次調査でも竪穴住居址・井戸址・溝があつて古墳時代前期～中期にかけての盛衰が知られている。また生産遺跡では那珂深谷サ遺跡（1）や同君体・久平遺跡（2）それに三筑遺跡（6）があつて那珂川と御笠川に挟まれた沖積地帯において紀元4世紀末以降本格的治水事業を基礎とした集約的水田經營が始まったと考えられる。またこのような水田經營を生産基盤として那珂丘陵では那珂八幡古墳（9）や劍塚古墳のような大型前方後円墳が出現している。

註

- 註1 「板付」一帶宮住跡調査とともにう乗原発を報告書一『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集』、1976年
註2 「板付丘陵縄文鏡面金被石」（2）『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第31集』、1973年
註3 「板付丘陵縄文鏡面金被石」（3）『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第57集』、1980年
註4 日本住宅公団「埋堀 福岡市比恵丘地遺跡」、1980年
註5 1981年調査・現在執務整理中である。
註6 「比恵遺跡一層6次調査・遺構復元」、『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第34集』、1983年
註7 「那珂深谷サ遺跡」1・2、『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第72・82集』、1981・1982年
註8 「新規前体遺跡」1・2、『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第100集』、1985年
註9 1983～84年調査。
註10 「久平遺跡」、『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第100集』、1980年
註11 那珂公民館「郷土の歴史を語ろう」、『資料第1号』、1966年



第2図　五十川遺跡群位置図 (1/4000)



图3-4 游离全图 (1 / 100)

III 調査の記録

調査地点の概要

那珂川右岸に沿って南区井尻より博多区比忠にかけて南北に伸びる広大な那珂丘陵南部(五十川遺跡群)における埋蔵文化財の調査は1971(昭和46年)年9月の山陽新幹線々路建設に伴う事前調査を第1次として1983(昭和58年)年までに第3次を数える。ここでは今回(第3次)に加えて第1~2次についても概要を述べる。

第1次調査(昭和46年9月~同47年2月)

山陽新幹線建設に伴う事前発掘調査で2地点(A・B地点)が調査されたがB地点は那珂川の氾濫原であり、遺構はA地点で多く検出された。A地点では土師器、黒色土器、瓦器などと共に竪穴住居址3棟・井戸址1基・溝7条・大小ピット・柱穴・溝状イコウなどがあり、12~13Cに時期推定されている。古代~中世紀における集落の一端が知られた。(五十川高木遺跡)

第2次調査(昭和55年)

民間宅地開発に伴う事前発掘調査である。第3次調査地点に接する。遺構は奈良時代~中世期に亘る竪穴造構および井戸址などが検出され、多量の奈良時代須恵器が出上した。調査結果については現在観察整理中であり報告書がまたれる。(五十川赤目遺跡)

第3次調査(昭和58年4月25~6月18日)

第2次調査と同様に民間宅地開発に伴う事前発掘調査である。調査区は鳥羽ローム土を基盤とする台地東縁部(標高9.4~9.6m程度で東側に落込む傾向にある)にあたると考えられるが、遺構部分は過去の住宅建設による削平・搅乱、開田にともなうと思われる地下げ作業によってかなり破壊している。

調査によって検出された主な遺構は弥生時代前期末~古墳時代前~後期・奈良時代・中世期に亘る生活遺構である。

弥生時代前期末では円形竪穴住居址1軒(S C09)のみである。続く古墳時代前~後期では方形竪穴住居址12軒・井戸址6基・竪穴造構1基が検出された。このうち古墳時代前期に属する遺構は竪穴住居址4軒(S C01・04・05・10)・井戸址6基(S E01~06)・竪穴1基(S K01)である。住居址は内部にベッド状遺構をもち、主柱穴2本を有する構造でカマドを持たないと考えられる。次に古墳時代後期では竪穴住居址8軒(S C02・03・06・07・08・11・12・13)が検出されている。住居址は内部にベッド状遺構をもたず、主柱穴4本を有し、カマドを持つ構造である。続く奈良時代では掘立柱建物址2棟(S B01・02)・溝遺構1条(S D04)がある。また中世期に属する遺構は掘立柱建物2棟(S B03・04)・溝遺構5条(S D01・02・03・05・06)である。以下遺構毎に個別説明を加える。

1 弥生時代

住居址 SC 09住居址（第5・6図、図版7）

調査区東端部を南北に横切る段おちによって南半分を欠損しているが規模的には直径4.4~4.5mをはかる円形住居址である。壁面は黄褐色火山灰（鳥栖ローム）となり、残存する北側壁面で高さ35~37cmをはかる。住居址床面は平坦であるが、明瞭な主柱穴は検出できなかった。また埋土内より出土した遺物も小破片のものが少量出土したにとどまった。

埋土—全体に厚さ5~10cmの薄層である。上部よりI層—暗茶褐色粘質土（SD03埋土）、II層—黒褐色粘質土、III層—暗茶褐色粘質土（I層より黒っぽい）、IV層—暗黃褐色粘質土（地山ロームを多く混入）、V層—灰黑色粘質土、VI層—黒色粘土（有機質粘質土）となる。

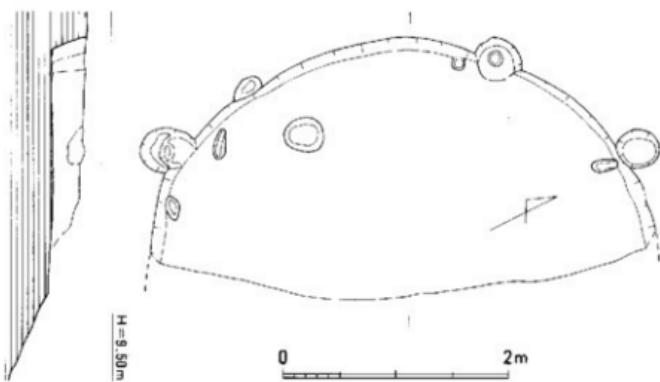
出土遺物（第6図、図版15）

出土遺物のうち図に供し得るものは少ない。1は彫形土器である。膨みの少ない胴部は口縁に至って如意形に緩く開く特徴をもつ。器面は全体に磨滅が著しく調整痕は不明である。器色は黄白色を呈し、胎土緻密・焼成は軟質である。口径27.2cmをはかる。床面出土。2は磨製石鏃である。末端部を欠損しているが形態は柳葉形となろう。残存長6.8cm、中央部幅1.6cm、厚さ4.5mmをはかる。背部は鏃をもたず断面は扁平である。頁岩質砂岩製。床面出土。

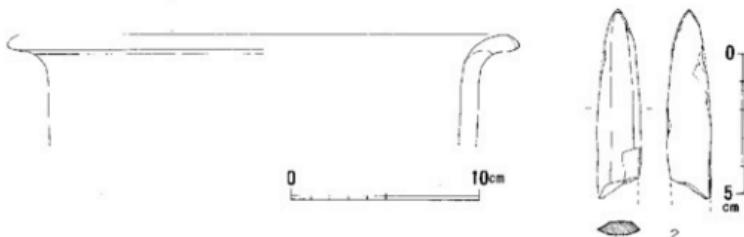
SC 09住居址は前記の様に埋土内からの出土品が少なく時期比定に困難が多かったが、出土縦片を検討した結果你生中期に属する明瞭な上器類はなく、出土彫形土器の時期と考えれば弥生時代前期末であろう。



第4図 弥生時代遺物分布図 (1/200)



第5図 SC 09住居址実測図 (1/50)



第6図 SC 09住居址出土遺物実測図 (1/3・1/2)

小 結

今回の調査では弥生時代に比定できる明らかな遺構は竪穴住居址1軒のみであった。住居址は少量の出土遺物であったが一応前期末の裏形土器を出土しておりこの時期の所産と考えてよく、また平面形態もこの時期のものに符合する。

調査区内ではこの他に古墳時代竪穴住居址・井戸址・溝状遺構の埋上中より弥生時代中期初頭裏形土器片が少量しており、これに続く中期中葉～後葉にかけての裏形土器破片がかなりの量出土している。またSD 04溝より中期前葉の時期に相当する大型甕(鉢)の口縁部破片が出土しており、付近に貯蔵墓地のある可能性が高い。次に中期に続く後期に相当する土器類などの遺物は出土していないが今回調査地点より南西に約150m程の地点にあたる五十川妙楽寺遺跡では石劍などの他に銅錫鋳型が発見されており、後期まで集落が発展存続するものと考えられる。

2 古墳時代

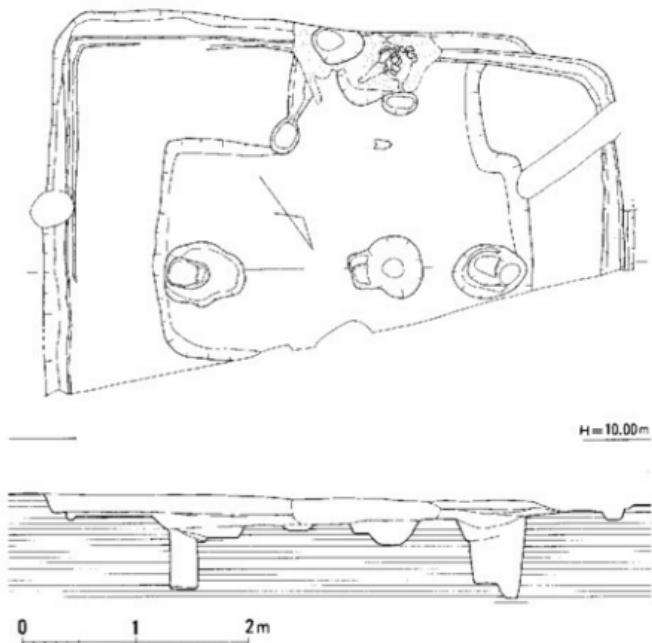
概要—古墳時代に相当する主な遺構は調査区のほぼ全域に散在している。それらは平面形が方形をなす竪穴住居址12軒、蒸振りの井戸址6基である。この他まとまりを把み得なかった小ピット群が倉庫的建物となる可能性をもっている。竪穴住居址群は重複して完全にプラン・構造を把握できないものも多いが、基本的に四方壁に沿ってベッド施設を有し、主柱穴2個を持つタイプとベッド施設がなく、主柱穴4個を持ち南側を除く何れかの壁近くにカマドを付設するタイプとに区別される。以下井戸址とともに個別に説明を加えることとする。

① 住居址

S C 01住居址（第7図・図版2）

S C 01住居址は調査区北西部で検出され区外に北壁および西壁・東壁の一部を残した。プラン

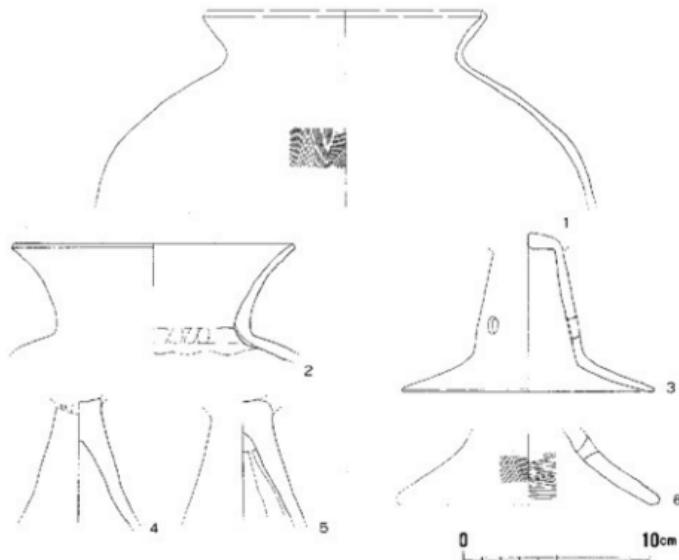
は南壁のみが延長を完全に残し長さ510～520cmをはかる点で東西に若干長い長方形となる可能性もある。内部は壁面に沿って幅10～15cm・深さ5～10cm程度の壁溝が巡る。ベッド施設は壁溝からの幅70～80cm、高さは床面より10～12



第7図 S C 01住居址実測図 (1/50)

cm程度の低いものであり、南壁部では中央部やや西偏りに幅170cm程度途切れる部分があつて外部との出入口部分と想定できる。またこのベッド施設の途切れた部分には焼土と土器類がまとまって出土している。次に床面には東西軸線に平行に主柱穴2個とこれに挟まれて炉址があった。主柱穴は東側のもので70×60cm、西側のものは65×50cmを測る程度の掘方を有し、柱痕々跡より推測すれば柱径は25cm程のものとなろう。炉址は長さが65×60cm程度の長円形で内部に黒色炭化物および焼上がりがつまり、壁面は堅く焼しまっている。深さは約20cmをはかり西側に向って下る。

出土土器（第8図） 本住居址で図に供し得るものは少なかった。1・2は壺形土器である。1は影みの強い脚部に短い内湾気味に外方に伸びる口縁をもつ。口唇部欠損。器色は外面暗黄褐色でスス付着。内面は淡黄褐色。胎土密。焼成堅緻。外面口縁部横ナデで以下は刷毛目調整。口径14.6cm。2は素直に外方に開く口縁を有し、頸部は直口となり、器壁は上部に従って薄くなる。器色内外面とも暗赤褐色。胎土粗。焼成やや軟質。口径14.5cm。3～6は高坏脚部破片である。脚部内抉りの深いもの（3）と浅いもの（4・5）とに区別される。器色は暗赤褐色～淡黄褐色を呈し、3・6は胎土粗であり4・5はともに焼成堅緻である。3の透し孔は3個である。また6は内外面とも荒いハケ目調整をのこす。



第8図 SC 01住居址出土遺物実測図（1／3）

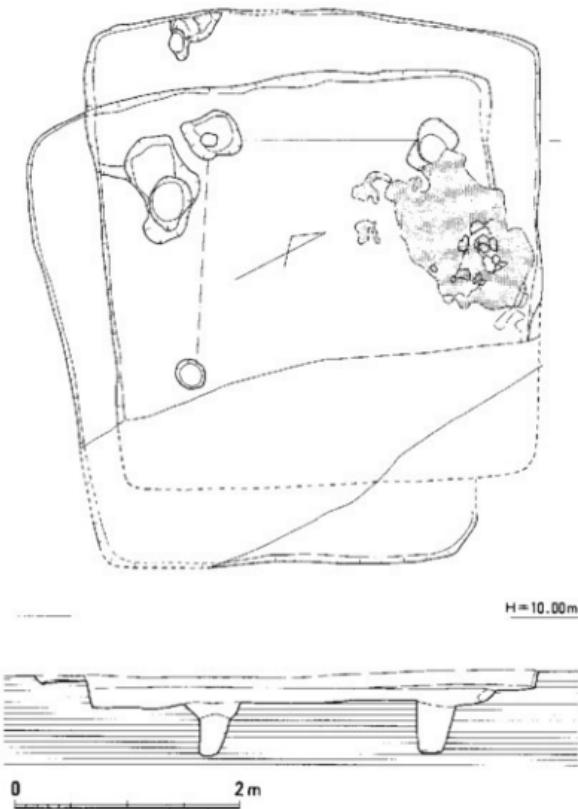
S C 02住居址（第9図・図版3） 調査区中央に位置する住居址でS C 03住居址を切っている。西壁長4mをはかり同規模の方形プランとなろう。主柱穴は4個と考えられ、柱間は南北ともに2mである。また北壁にカマド施設をもち、小型の壺形土器が掘えられていた。壁高30cm程度を残す。

出土遺物（第10図） 出土遺物は殆どが細片である。1はカマド内出土の壺形土器である。口径・器高がほぼ同一に近いずんぐりした壺で器色外面赤褐色・内面黒褐色を呈し、焼成堅密で胎土はやや粗である。外面は口縁部内外面ナデ調整、胴部中位はタテの細かい刷毛目調整である。また胴部内面は底部からのヘラケズリを行なっている。口径15.6cm、器高16.5cm。

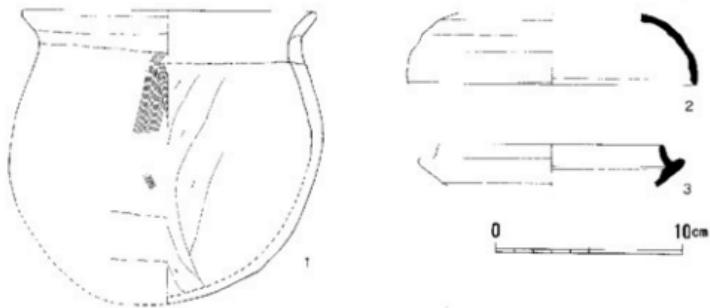
S C 03住居址（第9図・図版3） S

C 02住居址に切られる住居址で残りが悪く、残存する壁の延長、コーナーをつなぐと西壁で4~4.1mを割り、S C 02住居址と同規模となる可能性が高い。

出土遺物（第10図） 図に供したものは何れも須恵器小破片である。2は壺蓋である。口唇部内面には凹線文は無く、天井部に僅かにヘラ削りを残す。口径15.4cm。3は壺身で立ちがりは低く、受部もいびつで肉厚を感じを受ける。口径11.8cm。何れも器色淡灰色を呈し、胎土は密、焼成は堅密である。



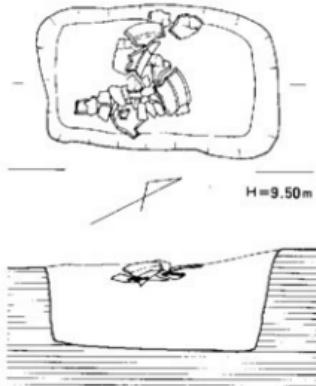
第9図 S C 02・03住居址実測図 (1/50)



第10図 S C 02・03住居址出土遺物実測図 (1/3)

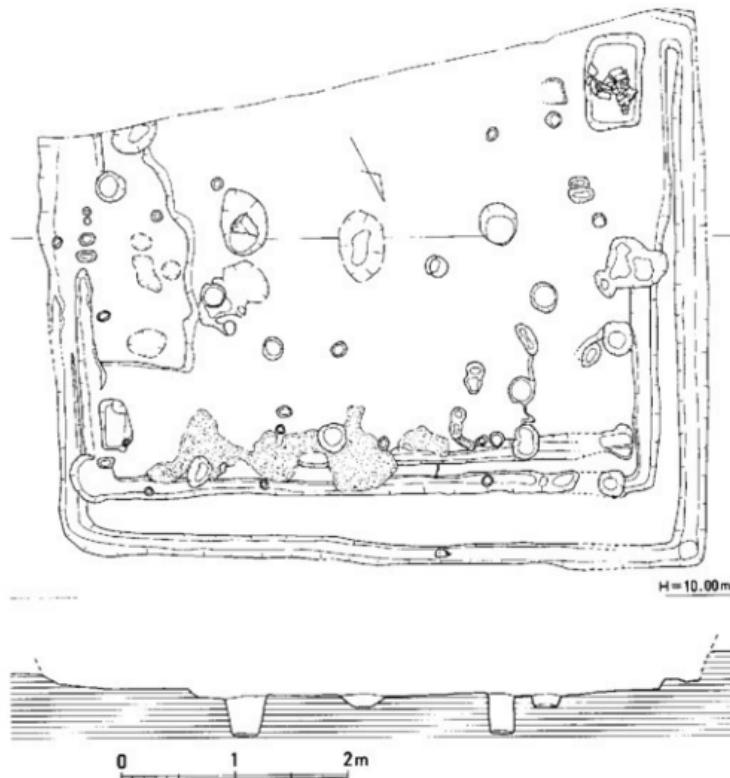
S C 04住居址（第11、12図、図版4） 調査区南端に検出された。南壁は調査区外である。平面形は北壁長が4.8mをはかり同規模の方形アランとなろう。東・西・北壁とも壁に沿って幅20cmの壁溝がめぐる。また北壁溝より幅30~40cmをもって平行に幅15~20cmの小溝がめぐり増築の可能性もある。主柱穴は2個でこれに換まれてほぼ中央に炉址を持つ。西壁南側では貯蔵施設と考えられる長さ85×50cm、深さ35cmをはかる方形土坑があつて彫形土器などの土器類が比較的まとまって出土した。また床面に密着する上器類も少量ある。

出土遺物（第13図、図版13） 住居址内で出土した遺物は全て上器類であつて須恵器は一切含まない。器種は彫形土器（1~3・5~7）、壺形土器（4・8）、丸底壺（9・10）である。



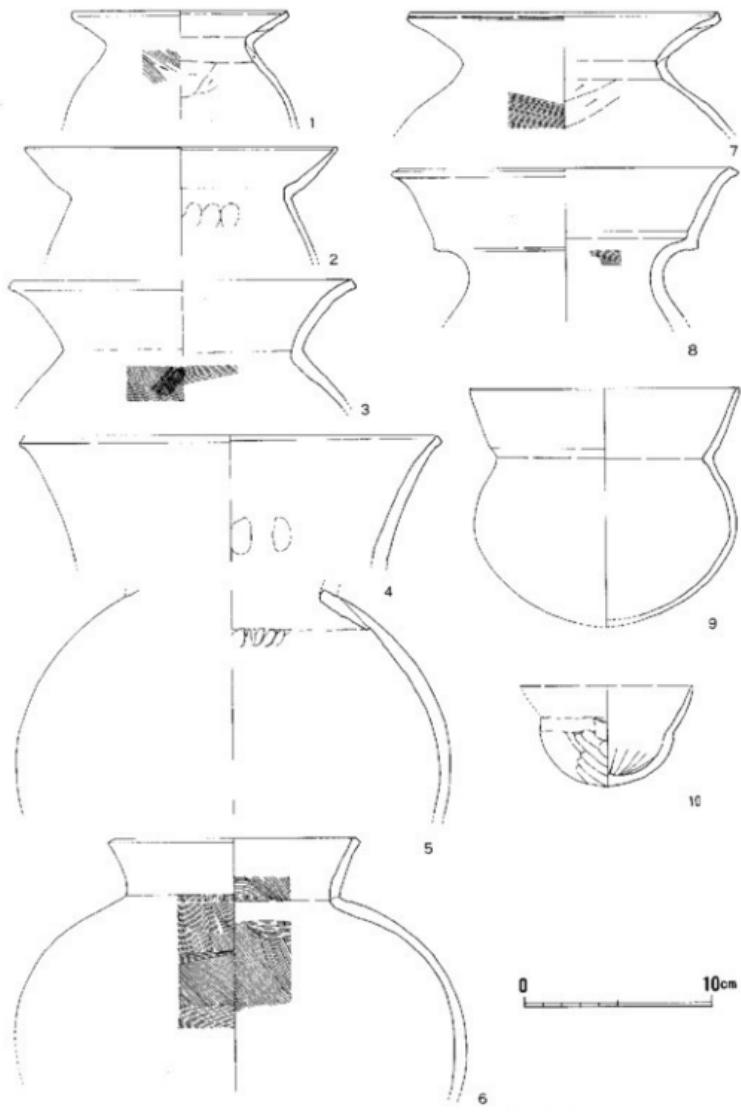
第11図 S C 04住居址内方形土坑実測図 (1/20)

1は頸部がよくしまり内青気味に外方に開く口縁は端部を細くつまみ上げる。外面淡灰褐色を呈し胎土粗、焼成軟質。胴部外面は荒い刷毛目、内面ヘラケズリである。口径11.3cm。2は内青気味に外方に開く口縁部端が跳ね上げ状となる。器色黄褐色。胎土粗。焼成軟質。調整は胴部内面に指おさえが残る以外は磨滅のため不詳。口径16.6cm。床面出土。3は口縁がよくしまった頸部から素面に外方に開く。器色黄褐色。胎土密、焼成堅緻。胴部外面細かい刷毛目調整。同内面は荒いハケ目。口径18cm。4は直立気味に伸びる口縁が端部近くで僅かに外方に開く。器色淡灰褐色。胎土密、焼成堅緻。内外面ともにヨコナデ。口径22cm。方形土坑出土。5は口縁部欠損。器色黄褐色。胎土密。



第12図 SC 04住居址実測図 (1/50)

焼成堅緻。内外面ともヨコナデか。東側主柱穴内出土。6はよく膨らんだ胴部に直立する短い口縁を有する。器色暗黄褐色。胎土粗。焼成堅緻。胴部内外面とも細かい刷毛目調整。他はヨコナデ。方形土壇出土。7も2と同様の形態を備えている。器色暗黄褐色。胎土密。焼成堅緻。胴部外面ハケ目。同内面ヘラケズリ。口径16.4cm。方形土壇出土。8は二重口縁壺形土器である。器色黄褐色。胎土粗。焼成堅緻。内面ハケ目以外ヨコナデ。口径18.4cm。方形土壇出土。9・10は丸底壺である。9は磨滅が著しい。器色黄褐色。胎土密。焼成軟質。口径14.4cm、器高12.6cm。10は口縁内外ヘラナデ。胴部内外ヘラケズリ。器色暗褐色。胎土密。焼成堅緻。

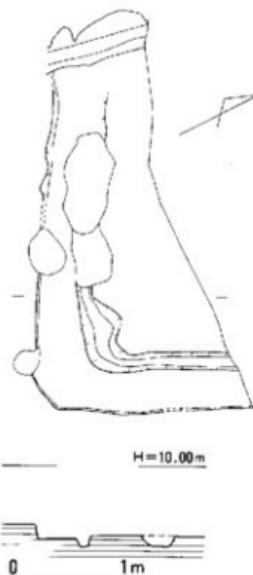


第13図 SC 04住居址出土遺物実測図 (1 / 3)

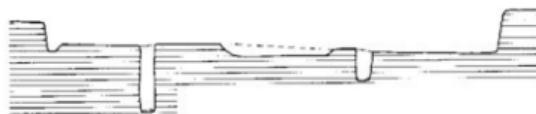
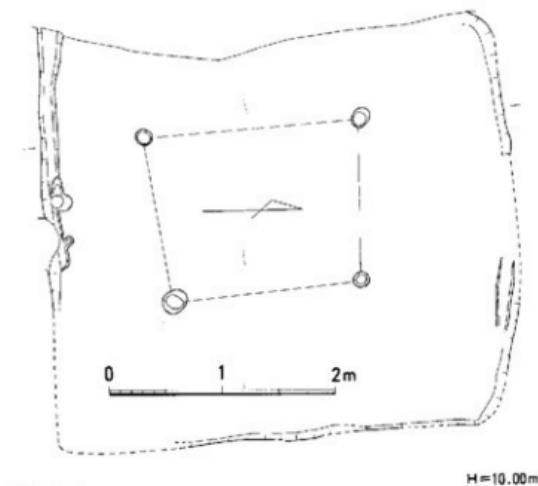
S C 05 住居址（第14図、図版5） S C 01 住居址の東側に隣接する住居址で東南側コーナー部分のみが残る。西側では奈良時代溝 S D 04に切られて延長を失なっているがこの溝以西にはこの南壁は伸びないと考えられる。また西・北壁もすべて調査区外に這入り形状は知れないが調査区内で見る限りでは遺存は非常に悪い。壁高は10~12cm程度が残る。内部は特に東壁部で幅35~40cmのベッド施設を造り出しておりこれに沿って幅10~15cm、深さ10cm程度の小溝がめぐるため外部との出入口は西或は北側にある可能性がある。壁長は前記のように南壁現長で3mあってこれを大幅に超えないと考えられる点で比較的小型の住居址であろう。また時期的には決定的な遺物を出土していないかベッド施設がみられる点でS C 04 住居址とはほぼ同時期と考えられる。

S C 06 住居址（第15図、図版5-2） 調査区中央で検出された。西壁を S D 01・04溝で切られている。また東側コーナー部分を S C 07 住居址掘方によって失なっている。壁長は北壁部では3.60mをはかり、東壁で推定3.80mと考えられる点でやや南北方向に長いプランとなる。また内部では南・北壁直下に幅・深さとも10cm程度の壁溝が残る。主柱穴は4個で径が14~20cm程度の柱穴である。柱間は西辺で190cm、南辺で150cmをはかる。なお壁高は20~30cmを残す。また内部では明らかにカマドと確認できるものは見当らなかった。

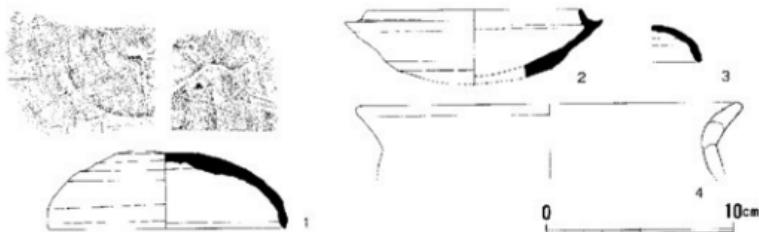
出土遺物（第16図、図版13） 本住居址の出土遺物も少量である。1~3は須恵器。4は上師器である。1は壺蓋である。外面天井部の上半部に回転ヘラケズリ、他は全てヨコナデ調整。口縁端部は差々異なる。外面天井部には器面調整後に1本の横沈線に9本の縦沈線を加えて腰ミノ状に仕上げた文様とこれと対峙させて矢状に3本沈線を描いたものが残る。器色暗赤灰色。胎土密。焼成堅緻。口径12.5cm、器高4cmをはかる。2は壺身である。受部の立あがりは弱く底部が厚い。外面底部の下半はヘラケズリ。他はヨコナデ調整。器色淡灰色。胎土密。焼成堅緻。口径11.4cm、推定器高3.7~3.8cm。3は壺蓋である。天井部の最上部にヘラ削り、他はヨコナデ、器色淡灰色。胎土密。焼成堅緻。4は菱形土器である。腹部を多く残さないが口縁部は短く外方に開く。内外面ともに磨滅がいちじるしく調整不明。器色は明褐色を呈し、胎土には石英砂の混入多いが密である。焼成は軟質である。口径は20.6cmをはかる。



第14図 S C 05 住居址実測図 (1/50)



第15図 S C 06住居址実測図 (1 / 50)

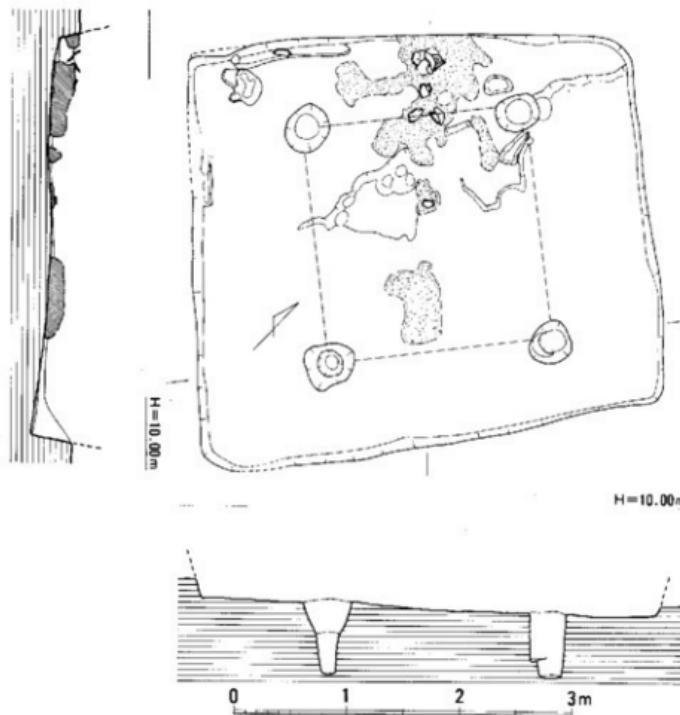


第16図 S C 06住居址出土遺物実測図 (1 / 3)

S C 07住居址（第17図・図版5・6） 本住居址は調査区中央より差々東寄りに位置し、周辺のS C 06・08・11住居址を全て切って新しく営まれている。平面プランは東西南北の壁長が4.1、3.9・3.6・3.2mをはかる方形である。壁面下では西・南辺に僅かに壁溝が残っている。内部で

は西壁にカマドが付設されている。構築には青灰色粘土が使われているが旧状をとどめず、大型甕が据えられている。主柱穴は4個で径が40~45cm程度の掘方がなされ、柱自体は径が15~18cmの大きさであろう。柱間は東・西辺長2m、南北辺長2.1mをはかる。遺物はカマド内部出土土器以外に西側壁溝内で須恵器坏が出土した。

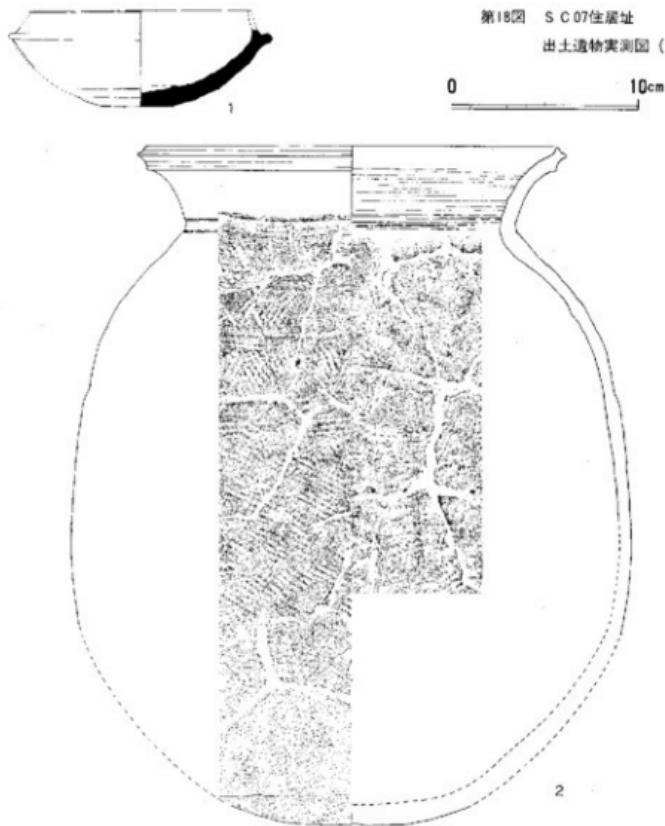
出土遺物（第18図、図版13） 出土遺物は少量であり土師器類の細片が多い。1は須恵器坏身である。器色は淡赤褐色を呈する。胎土は微砂を多く混じてある。焼成は軟質であり、全体に分厚く精選された上器ではない。調整は体部外面下半にヘラケズリを施す以外は全てヨコナテ調整である。推定口径11.6cm、同器高5.1cm程度である。2はカマド内に据え置かれていたと考えられる甕形上器である。全体に重心が調節部下半におかれ、口縁部を除けば横瓶に似た器形となる。頸部はよくしりり、ゆるやかに外反する口縁部は端部直下に一条の突帯を付して須恵器的手法をおもわせる口縁処理である。器色は黄褐~赤褐~赤橙色などに部位によって変化

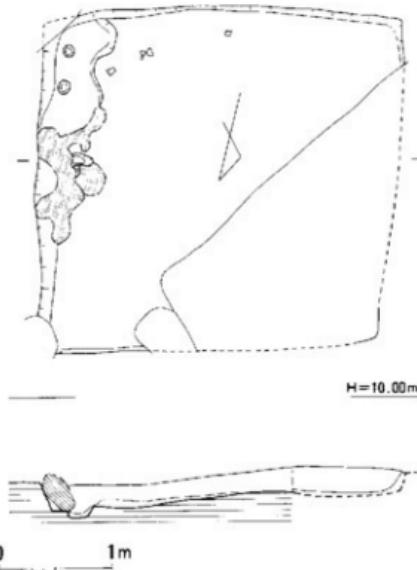


第17図 S.C.07住居址実測図 (1/50)

している。胎上には石英砂を多く混入し密である。焼成は堅緻である。器面調整は粗雑で部位によってまちまちである。頭部より肩部まではタテの平行叩き後にヨコナデ調整をおこなう。肩部以下底部までは平行叩きを連続的に方向を変えて行なっているため特に胴下半では擬似格子目状となる。また内面は顕著な青海波文は見当らず胸部中位の壁面に半円形のあて具痕らしいものが観察できる。口径21.8cm、器高36cmをはかる。2と類似する擬似格子目状の叩き目調整を行なう表の類品は東区下和白塚原古墳群山ノ下文群第1号墳のIV区埴輪部で他の須恵器壺蓋類とともに出土しており、時期的に7世紀を前後するものと考えられている。また西区拾

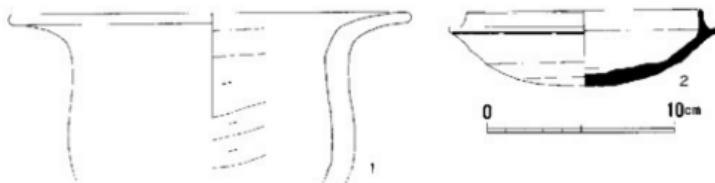
第18図 S C 07住居址
出土遺物実測図 (1 / 3)





第19図 S C 08住居址実測図 (1/50)

全体に分厚くすんぐりした感じをあたえる。器色赤褐～赤橙色。胎土は石英砂の混入多く粗。焼成は軟質。外面口縁～頸部ヨコナデ。内面胴部はヨコヘラケズリ。口径21.2cm。2は須恵器坏身である。受部の立あがりは低いが直立する。器色は淡灰色を呈し、胎土は密である。焼成堅緻。体部外面下半はヘラケズリ、以上はヨコナデ。内面はヨコナデ後底部のみナデ調整。口径12.4cm、器高4cmをはかる。この他に東コーナー部床面で鉄滓2個が出土している。何れも径が3cm程度の塊状のものであり本住居址に伴うものと考えられる。



第20図 S C 08住居址出土遺物実測図 (1/3)

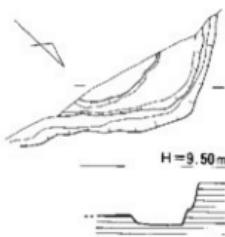
六町広石古墳群II群1号墳出土のも
のにも類品が見出され、6世紀後半
代に位置づけられている。

S C 08住居址 (第19図・図版6)

S C 07住居址の東側に位置し西・
北壁を切られるが西側コーナー部分
の痕跡が同住居址の床面に残る。壁
長は南壁3.2m、西壁2.8m程度と考
えられ、壁高は20cmを残す。主柱穴
については精査したが明らかに出来
なかった。東壁中央部にカマドが付
設されているが明らかな形をなさな
い。構築には青灰色粘土を使用して
いる。東コーナー付近の床面より須
恵器坏身、鉄滓が出土した。住居址
としては比較的小型の部類に這入ろ
う。

出土遺物(第20図・図版13) 1は土
師器裏である。口縁は長く外方に開き

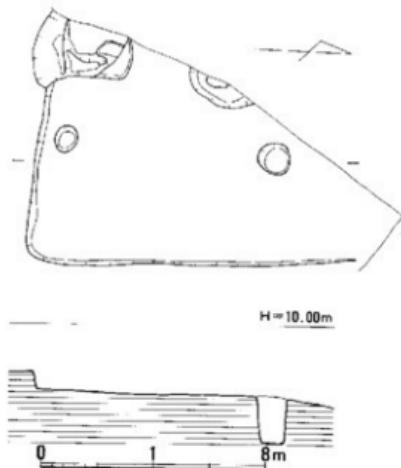
S C 10住居址（第21図） 調査区南側に位置する。北側コーン部分が露出していると考えられる。埋土は漆黒色粘質土で比較的単一であり、下部に從って黄褐色ロームブロックを混じる。壁高は30cm程度を残す。輪郭線は北壁では3m以上・西壁で1.9m以上の壁長となるが規模については正確に見出せない。内部は外郭より一段下って半地下部をなし更に床面との間に西側で幅35cm、北側で15cm程度の連絡する溝がめぐり壁溝の一部をなすものと考えられる。これらの形態よりするとプランはS C 04住居址に類似するものか。



第21図 S C 10住居址実測図 (1/50)

S C 11住居址（第3図） S C 07・08住居址に切られる住居址である。壁面は南・東側を全く欠失しているが北壁および西壁の一部をS C 07住居址の床面に残す。北壁長はほぼ3.5mをはかり、西壁も同様に3.5m以上の規模となるものと考えられ、若干南北方向に長いプランとなろう。壁高は北壁部分で20~25cmを残している。また壁溝の有無および主柱穴の位置・規模内容についても触れるところがないが推定すれば主柱穴4個を有し、各れかの壁にカマドを付設するS C 07・08タイプのプランになるであろう。

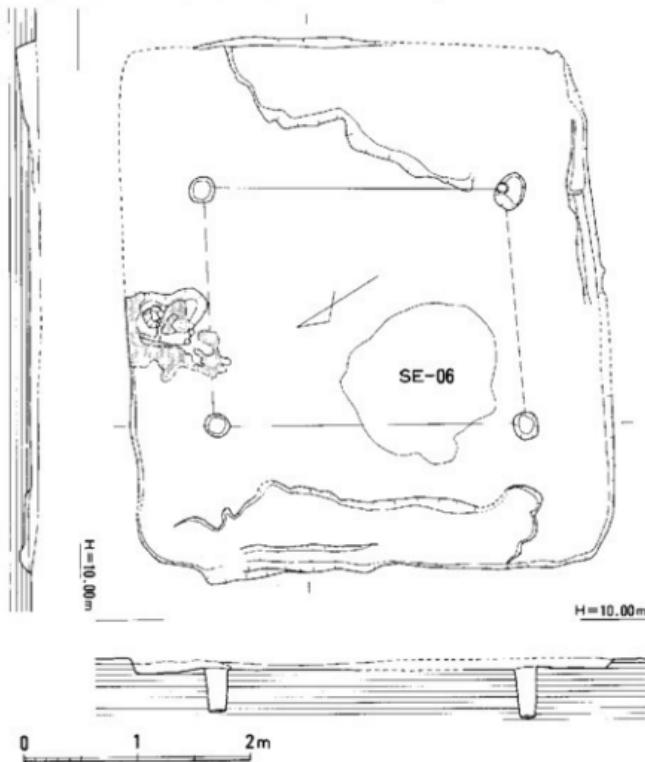
S C 12住居址（第22図・図版7） 調査区西端部で検出された。西側は調査区外となる。住居址壁は最近までの宅地造成で50cm以上の削平を受けているものと考えられ、東壁は殆ど壁高をもたない。壁長は現状で南壁が2m以上、東壁で3m以上と考えられる。壁高は南壁で15cm程度を残すのみである。壁下には壁溝のあった痕跡はみあたらない。また主柱穴については断面図にかかる柱穴がこのうちの一箇と考えられる点で本住居址はS C 07住居址のタイプに類似するプランをもつ可能性が高い。埋土は淡褐色粘質土であるが遺物類は全く出土することがなかった。調査区内では最も高所に位置する住居址である。



第22図 S C 12住居址実測図 (1/50)

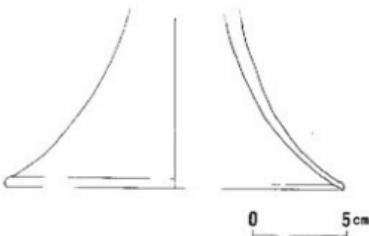
S C I3住居址（第23図・図版8） 調査区西端部に検出された。宅地施設のため削平・攪乱が大きい。壁長は西壁が4.1m、南壁が4.4mをはかり若干東西に長い方形プランをなす。南・西側の一部に幅20cm 深さ10~15cmの駁溝がみとめられる。内部には北壁中央よりやや西寄りにカマドを付設しており、高壙壙部が支脚としてか据えられている。カマドの構築は青灰色粘土を使用する。主柱穴は4個であり、何れも径が20cm、深さ35~40cmの細くて深い柱穴となつておる、柱間は西辺で2.7m、北辺で2.1mをはかり前の平面プラン軸と一致しない。また主柱穴のうち東側のものには約10cm程度の柱痕跡が認められる。床面上では S E 06井戸址が重複しているが埋没後にこれが當まれている。

出土遺物（第24図・図版14） 出土遺物は殆ど唯一である。カマド中央部で潰れた状態で出



第23図 S C I3住居址実測図 (1/50)

土した。坏部を欠失する高坏脚部である。器色は淡黄褐色～赤褐色を呈し、胎上はやや粗。焼成は堅紙である。器面調整は二次焼成の影響が大きく内外面ともに磨滅が非常に著しく不明である。器厚は非常に丁寧に調整されたものと考えられ均一でシャープに仕あがっている。脚底径は18.2cmをはかる。



第24図 S C 13住居址出土遺物実測図 (1/3)

② 井戸址

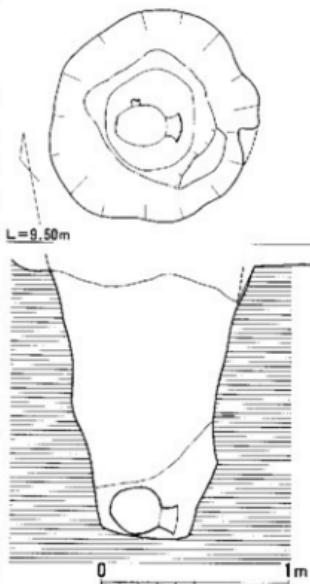
概要—調査区内に6基の井戸址を検出した。分布は散漫であるが、大きく東側の2基と西側の4基に分ける事ができる。これらの井戸址は時期的に余り差異は無く、殆ど古墳時代前期（布留式併行期）に収まってしまう。全て素掘りの井戸で、底は八女粘土まで達している。深いものでは確認面から275cmあり、湧水が激しい。出土遺物は

完形の壺・甕などの他、上製品・果核等がある

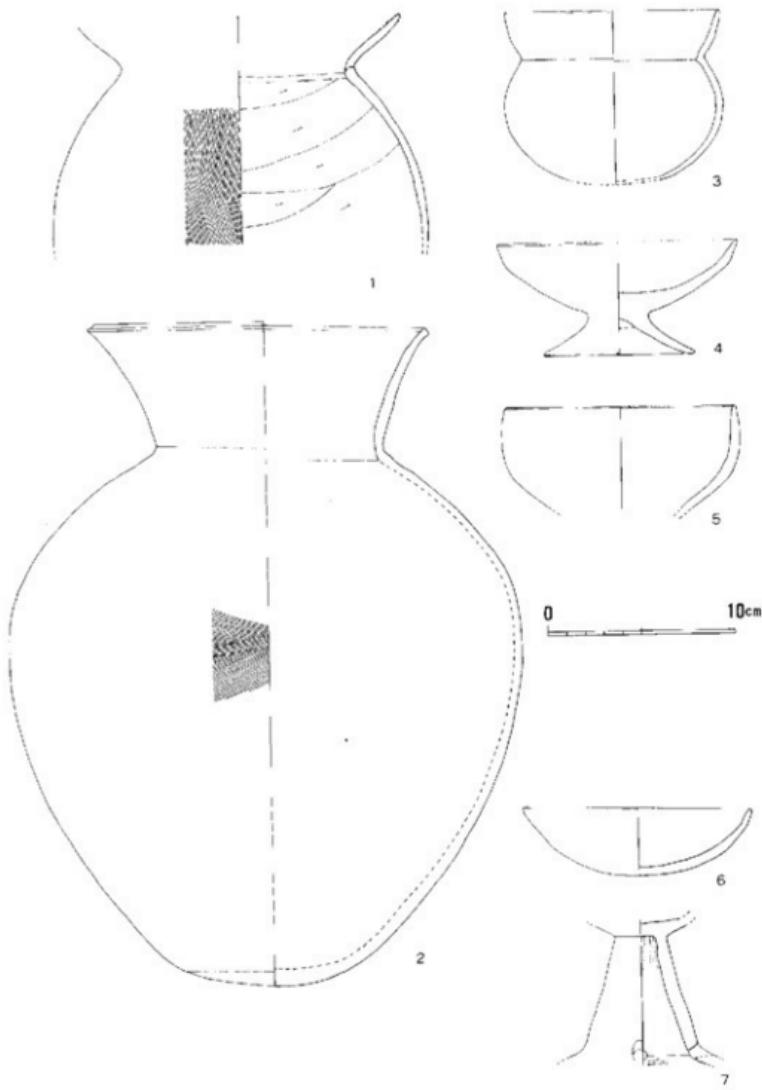
S E01井戸址（第25・26図、図版9・14）

調査区北東側に位置する。上面径110cm、底面径55cm×47cm、深さ150cmを測り、底面向って緩やかに窄まるが、途中-90cm付近で上層が八女粘土に変化し、僅かな段を持つ。八女粘土の一部は剥落して部分的に抉れている所がある。覆土は上半部が黒褐色粘質土で土師器片を多数含み、下半部は八女粘土が混ざる黒色土となっている。遺物は底面に横倒しの状態で出土した完形の壺形土器の他、甕、小形壺、脚台付壺、高坏などがある。

第26図1は、口縁部が「く」字形に外反する要で、胴部最大径は12.4cmを測る。口縁端部は破損して判然としないが、口頭部は内外面共ヨコナダ、胴部外面はタテハケ目、内面は左→右のヘラケズリが施されている。2は、完形の壺形土器で、倒卵形の胴部に緩やかに外反する口縁部が付く。器高35cm、口径18cm、胴部最大径はやや上位にあり27.1cmを測る。全体に器面が磨滅剥落しているが、胴部外面は非常に細かいハケ目、内面はヘラケズリ



第25図 S E 01井戸址実測図 (1/30)



第26図 S E 01井戸址出土遺物実測図 (1/3)

に指圧痕を多く残す。口頭部は内外面共ヨコナデで、口縁端部は少し窪む。3は口径11.8cm、器高推定9.2cmの小形壺形土器である。口縁はやや内弯気味に外反し扁球形の胸部に移行する。4は浅い塊部の脚台付焼で、口径12.6cm、器高6.0cm、脚径8.0cmを測る。5・6は塊で、5が口径12.2cm、6が口径12.0cm、器高3.6cmを測り、6は5に比べ浅い器形となる。小形壺形土器や塊は磨滅が激しく調整が判然としない。7は高壺の脚部で、裾部は屈曲して広がる。屈曲部に3個の透孔を穿ち、脚内面上部にヘラケズリ、裾部内面にヨコハケ調整がみられる。

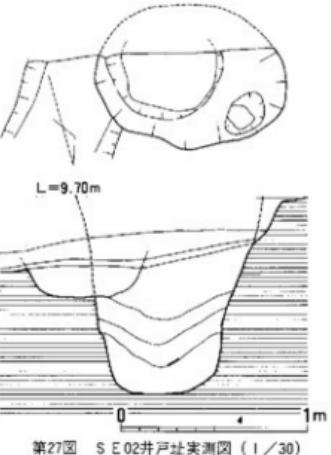
S E 02井戸址（第27図・図版9）

調査区東南側の段落ち部に位置し、かなり削平を受け、S D - 05にも切られている。上面は橢円形を呈し、長径100cm、短径推定80cm、深さ105cmを測る。底面は径50cmの円形に近い形となる。確認面下40cmで土層が黄白色の八女粘土に変り、湧水がみられる。覆土は旧水田耕土・床土の下に、黄褐色のロームブロックを含む黒褐色粘質土、黄褐色ローム土、黒褐色粘質土が続き、最下層は暗黃褐色粘質土で、基盤の八女粘土を含みバサバサになっている。遺物は少量で図示できるものは無いが、外面タテハケ目、内面ヘラケズリ調整を施す薄手の壺形土器などが出上している。

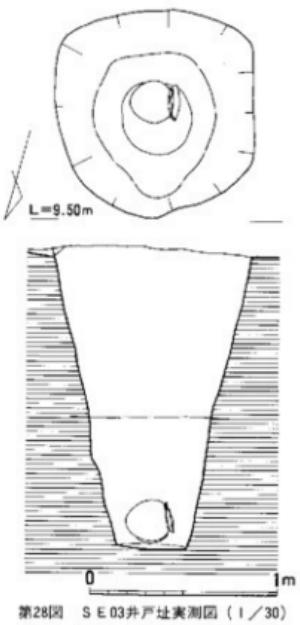
S E 03井戸址（第28・29図・図版10・14・15）

S C - 01西側に位置する。上面はやや隅丸方形に近い円形を呈し、東西105cm、南北110cm、深さ155cmを測る。底面は径37cmで上面から次第に窄まり、途中、土層が八女粘土に変化する部分で緩やかな段を持つ。底面からやや浮いた状態で、完形に近い壺形土器や土製品が出土した。

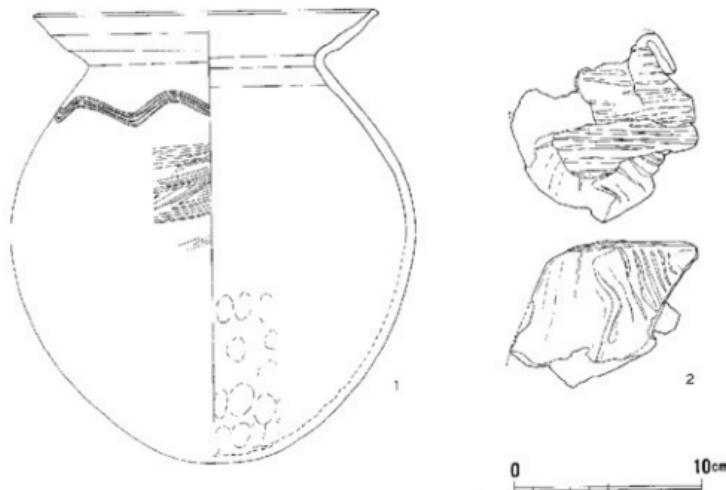
第29図1は壺形土器で、器高24cm、口径18.2cm、胴径21.5cmを測る。口縁部は僅かに内弯気味に外反し、端部は横み上げて肥厚する。肩部はナデ肩で、最大径が胴中



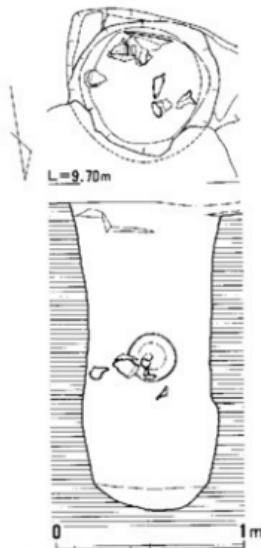
第27図 S E 02井戸址実測図 (1/30)



第28図 S E 03井戸址実測図 (1/30)



第29図 S E 03井戸址出土遺物実測図 (1/30)

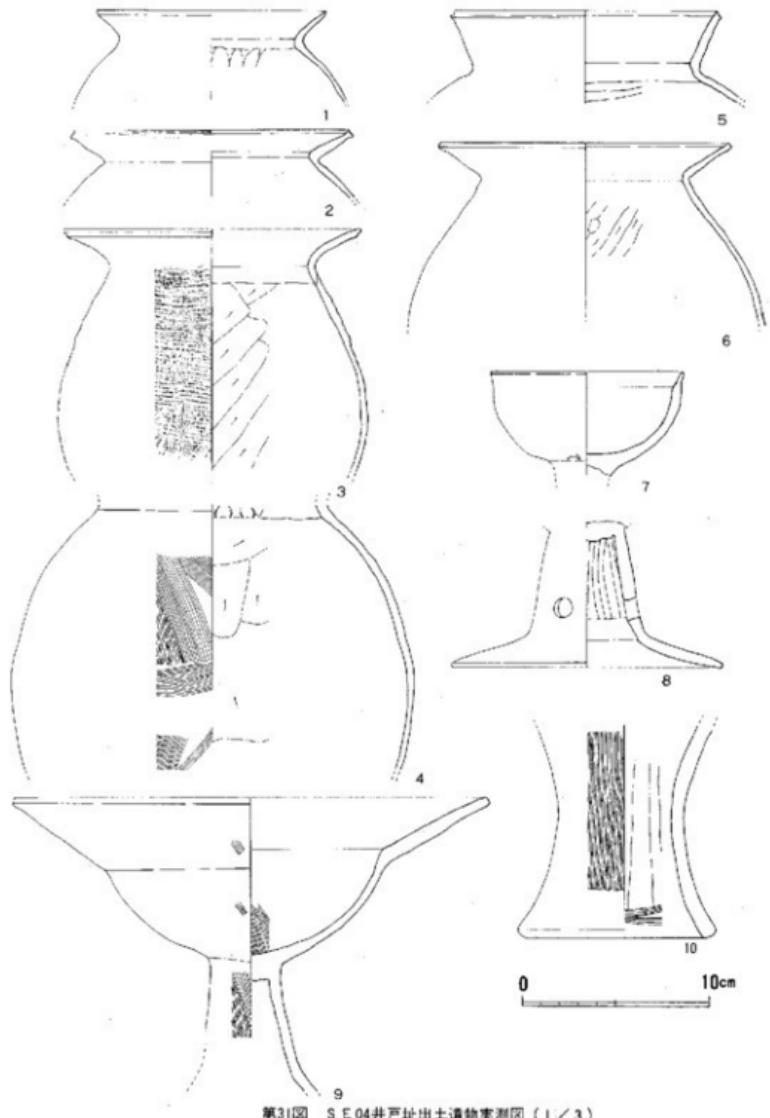


第30図 S E 04井戸址実測図 (1/30)

位にくる。口縁部内外面はヨコナデ、肩部外面には4本単位の波状文を施し、胴部上半はヨコ及びナメのハケ目、下半はタテハケ目の後ナデ消し調整を行なっている。内面は頸部に指圧痕が連続して残り、胴上半はヘラケズリ、下半は指おさえが認められる。全体に薄手作りで、外面にカーボンが付着し、内面にも膠着物がみられる。2は形態の不明確な土製品で、粘土塊状のものに沈線を加える。亦褐色を呈し、焼成が悪く、粘土に近い状態になっている。井戸祭祀に使用したものであろうか。

S E 04井戸址 (第30・31図・図版10・14・15)

調査区西側中央部に位置し、近代の野溜によって北側部分は大きく削られている。上面は径80cmではほぼ円形に近く、深さ165cm、底径60cmを測る。掘り方は上面から僅かに窄まりながら深くなり、確認面下-100cmで土層が八女粘土に変化し、それ以下はややふくらみを持って底部に至る。遺物は底面からかなり浮いた状態で、變形土器、高壺、器台などがまとま



第31図 S E 04井戸址出土遺物実測図 (1 / 3)

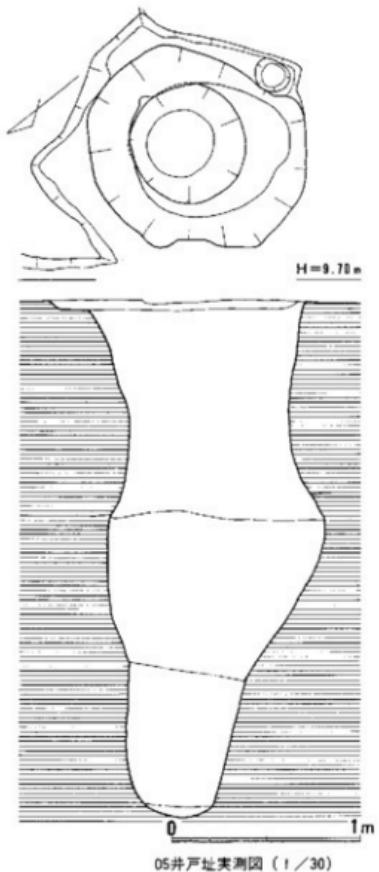
って出土した。

第31図1～6は夔形土器で、1は口径12.2cm、外反する口縁部を持ち端部は尖る。胴部外面には右下りの細かいタタキ状痕が観察される。また、頸部内面には連続する指圧痕、胴部内面にはヘラケズリが認められる。2は口縁部が強く外反し、口唇部は沈線状に若干窪む。口径14.6cm。口縁部外面はヨコナデ、頸部内面は横方向のヘラケズリが観察される。3は口径15.8cm、口縁部は強く外反し、端部下は沈線状に窪む。胴部外面は横方向のタタキ、内面は左→右

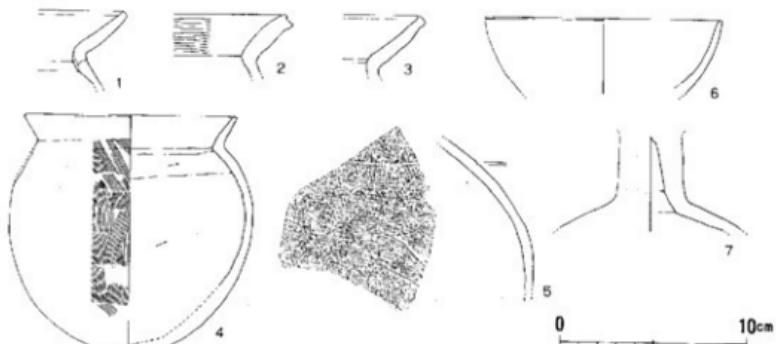
方向のヘラケズリが施されている。4は口縁部を欠き、胴部最大径が24.4cm、外面は細かいタテ、ヨコ、ナナメのハケ目調整、内面は頸部付近に連続的な指おさえ、それ以下はタテやナナメ方向のヘラケズリが施される。5は口径14cm、外反する口縁端部は窪み、胴部内面にヘラケズリがみられる。6は口径15.2cm、口縁部は強く外反し、端部を少し摘み出す。全体に風化が激しいが、胴部内面に指圧痕とヘラケズリが観察される。7は脚付塊で口径10.2cm、口縁端部は外方に引き伸す。外面にはナデ調整がみられるが、下半に細かいハケ目を残す。内面はヘラ状の工具で、ナデかミガキが加えられている。8は高坏の脚で裾部は屈曲して広がる。透孔3個を穿ち、内面にはヘラケズリが施される。9は坏径25.5cm、坏高8.8cmのやや大形の高坏で、口縁部は屈折して大きく広がる。全体に磨滅が著しいが、坏内外面、脚外面に細かいハケ目を残す。10は器台の下半部で、底径10.6cm、外面は細かいタテハケ、端部はヨコナデが施され、内面はシボリ、下端は荒いヨコハケ調整がみられる。

S E 05井戸址（第32・33図・図版11・15）

S E -04南西3mに位置し、井戸址の中では最も深いものである。上面はやや橢円形を呈し長径120cm、短径100cm、深さは275cmあり、



05井戸址実測図 (1/30)



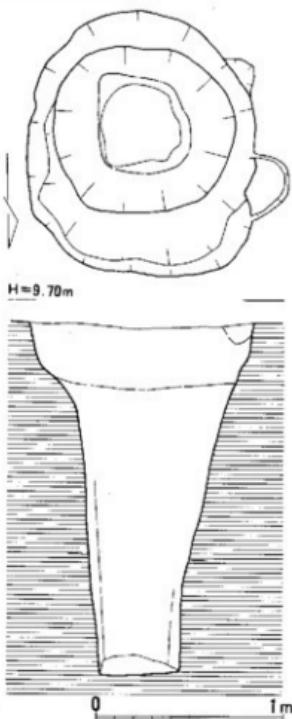
第33図 S E 05井戸址出土遺物実測図(1/3)

併35cmの底面へ至る。上面から110cmで土層が八女粘土に変化し、その部分が大きく換れた格好になっている。掘り方の下部は次第に窄まり、更に緩やかな段を形成し若干斜めに掘り込まれている。遺物としては、上半部黒色土から小片ではあるが甕、壺、壇、高坏などが出土し、井戸底からは桃の果核が3個出土した。

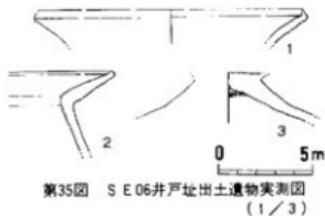
第33図1・3は、やや内凹気味に外反する甕の口縁部で、端部を摘み出し若干肥厚させる。内外面共ヨコナデで、1は胴部内面にヘラケズリがみられる。2は「く」字形に外反する甕の口縁部で、端部は窪み、口縁内面に荒いハケ目が施される。4は小形の甕で、器高12.5cm、口径11.3cm、胴部最大径13.2cmを測る。胴部はタテ及びナナメのハケ目、内面はヨコからナナメのヘラケズリが施される。5は壺の肩部で沈線一条を施し、外面は細かいヨコハケ目、内面は下から上方にヘラケズリが加えられている。6は口径12.6cmの壺で、内外面ともヘラナデされ光沢がある。7は高坏の脚部で磨滅が激しく、調整は判然としない。

S E 06井戸址（第34・35図・図版11）

S C -13と切り合いになるが、住居址よりも古い。上面はやや梢円形を呈し長径140cm、短径120cm、深さ



第34図 S E 06井戸址実測図(1/30)



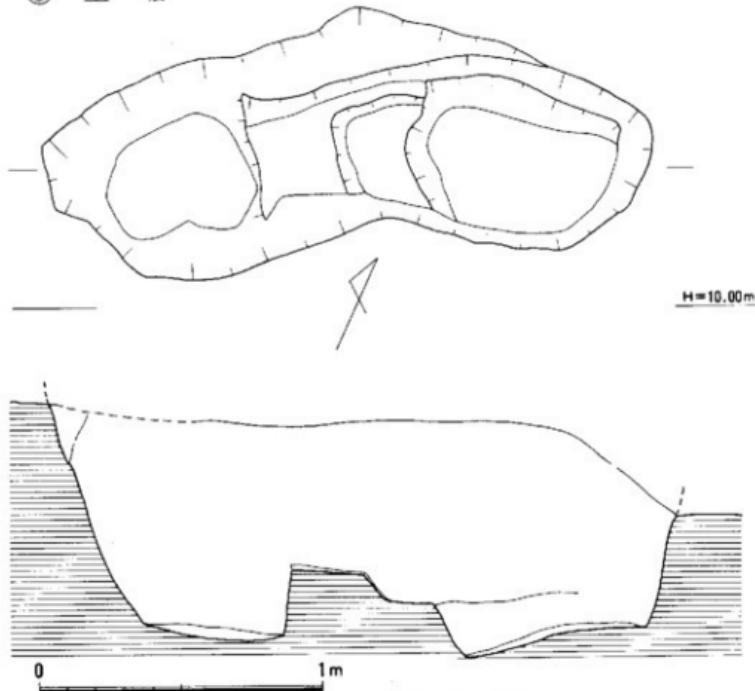
第35図 S E 06井戸址出土遺物実測図
(1/3)

185cmを測る。掘り方は上部に段を持ち、徐々に窄まりながら少し角張った底部へ移行する。底面は径40cmで八女粘土まで掘り込まれている。

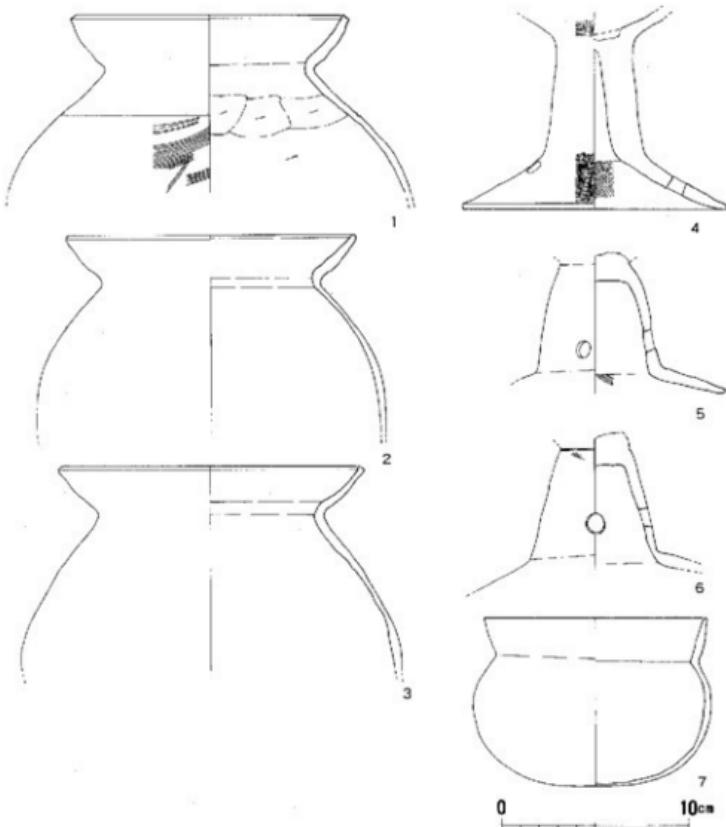
第35図1は、甌の口縁部で径14.5cm、外反して端部を摘みあげ肥厚させる。風化が激しく調整が判然としない。2も甌の口縁部で、外反する口縁の端部を少し摘みあげている。風化が激しいか、口縁部内外面はヨコナデ、頸部内面はヘラナデ、胴部内面は

ヘラケズリが施される。3は脚付甌の脚部で、風化が激しく調整は判然としない。脚部内面の芯部は小穴状に窪む。

③ 土 坡



第36図 S K 01土坡実測図 (1/20)



第37図 SK01土塙出土遺物実測図 (1/3)

S K 01 土塙 (第36・37図・図版12・15)

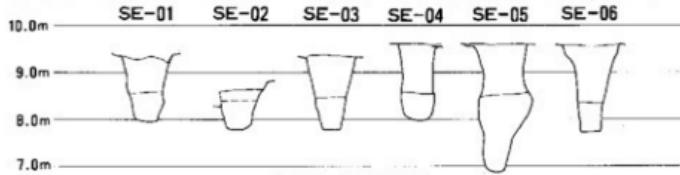
調査区南側東寄りの地点で土塙1基を検出した。不正楕円形で主軸をN-66°Eにとり、長さ215cm、幅75cmを測る。深さは部分的に異なり、西側77cm、中央部は浅くなつて50cm、東側は最も深い部分で83cmとなる。東端部は近世の搅乱によってかなり削平されている。出土遺物は全て土器類で、黒色土中に投げ込まれた様な状態で出土した。

第37図1~3は甌形土器で、1は口縁部がやや内湾気味に外反し、端部を幾らか摘み出す。口径14.2cm。肩部はナデ肩で一条の沈線を巡らす。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面

は荒いヨコハケ目、内面は左→右のヘラケズリが施される。色調は淡い黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが焼成は堅緻である。2も1と同様口縁部がやや内弯気味に外反し、端部を少し摘みあげている。口径15cm。肩部はナデ肩で胴の張りは小さく、胴部最大径は18.6cmとなり胴中位にくる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は粘質土の固着が激しく判然としないが、内面にはヘラケズリが施されている。器面は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含むものの、薄手作りで焼成は堅緻である。3は口縁部が内弯気味に外反し、端部は摘みあげて肥厚させる。肩部はナデ肩で胴部最大径は中位にくる。口径15.6cm、胴部径20.2cmを測る。薄手作りで、口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は剥落磨滅が著しく、判然としないが、内面に指圧痕が僅かに残る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含むが緻密である。焼成は余り良く無い。4~6は高壺の脚部である。4は底径14cm、円筒部は肉厚でふくらみを持たず、緩やかに屈曲して裾部に至る。壺下端部及び裾部内外面には荒いハケ目が残るが、筒部はナデ消されている。裾部に3個の透孔を穿つ。色調は赤褐色を呈し、胎土に石英砂を多く含むが、焼成は堅緻である。5は筒部に膨らみを持ち屈曲して裾部に至る。全体に磨滅が著しいが、外面はヨコナデ、裾部内面に細かいハケ目が残る。透孔は筒部に3個穿たれる。器面は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒を僅かに含むが精良にして密である。焼成も良好である。6は裾端部を欠くが、筒部は僅かに膨らみを持ち屈曲して裾部に至る。筒部上端の壺部接合面には櫛歯状工具痕が残り、内面にはヘラケズリが認められる。淡赤褐色を呈し、胎土は精良であるが焼成が余り良くない。透孔3個。7は口径11.9cm、器高8.9cm、胴部径12.7を測る小形の壺形土器である。橙褐色を呈し胎土は精良であるが焼成が余り良くない。器面は風化が激しく調整が判然としない。

小 結

これまで古墳時代に相当する各遺構について個別に説明を加えて来た。今回調査では限られた調査範囲の中でしかも遺構の残りの悪い状態ではあったが五十川遺跡群における古墳時代集落の一端に触れることが出来た。同時代に属する遺構は住居址12軒、井戸址6基、土塹1基である。住居址は前記の様にプラン・構造の上で2形態に分かれる。一は方形プランで四方の壁に沿ってベッド施設を有し、主柱穴2個およびこの間に炉を有するものと二に方形プランでベッド施設を持たず、主柱穴4個で何れかの壁中央にカマドを持つものである。これらは出土遺



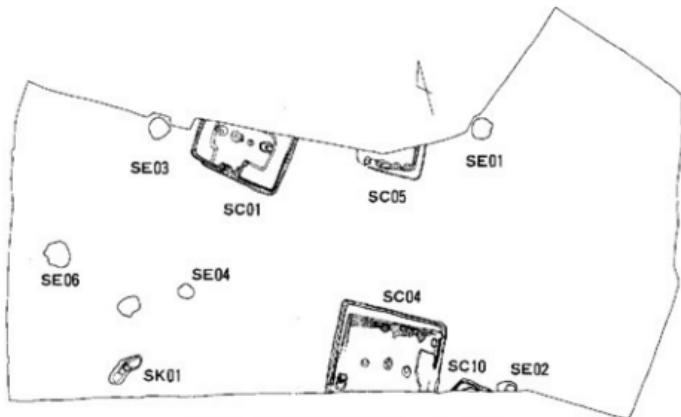
第38図 井戸址断面図

物の上からも時期的にII期区分が可能であり、井戸址・土塙を含めて考え得る。I期は土師器のみを出土するもので住居址ではSC01・04・05・10、井戸址SE01～06、土塙SK01が相当する(第39図)。II期は須恵器を通有に出土するもので住居址SC02・03・06・07・08・11・12・13がこれに相当する(第40図)。以下各期について若干検討を加えたい。

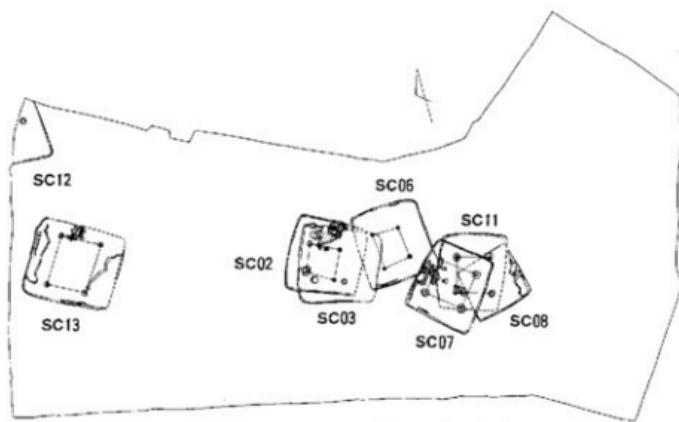
古墳時代I期(第39図)

住居址・4軒(SC01・04・05・10)のうちSC01およびSC04のみがほぼ全体を知りうるのみである。調査区内では重複が予想されるのはSC04とSC10であろう。第II期の分布に比較すると散在的である。構造規模では第II期に属すると考えられるどの住居址よりも相対的に大きく、方形プランと想定すればSC01壁長4.8m、SC04壁長5.1mであって床面積を出せば26m²・23m²程度となろう。更に調査部分の比較的大きかった両住居址では第II期に比較してカマド施設が屋内に無かったことはほぼ知られ、未だ炉のみであろう。また外部と連絡する出入口は南側につく可能性が高い。出土土師器では甕類があり、球状の副部は頭部で強くしまり内舟気味に外反する口縁部は縦部内面が跳ねあげ状になる特徴をもち井戸址・土塙と共通する組合せをもっている。

井戸址は、第I期住居址群を取り囲む様な形で分布する。全て素掘りで、鳥栖ロームから掘り込まれ、下面是黄白色の八女粘土まで達している。鳥栖ロームと八女粘土との境は標高8.3～8.6mで、東南側も同じレベルで続く。湧水は、鳥栖ロームと八女粘土との境、及びその下部に認められ、東側台地縁の方が量的に多い。SE-01と03にはそれぞれ完形の上器が出土し、時期的には布留式併行期と考えて差しつかえあるまい。他の井戸址も出土遺物から5世紀初頭



第39図 古墳時代遺構分布図-I (1/200)



第40回 古墳時代遺構分布図 - 2 (1/200)

代に収まってしまうものと考えられる。

土塙は、1基だけ確認したが、不定形で、布留式土器併行期の甕や高杯などが折り重なって出土したため、土器の投棄穴ではなかったかと考えられる。

古墳時代II期（第40回）

II期に相当する遺構は住居址8軒（SC02・03・06・07・08・11・12・13）である。調査区内では中央部に6軒の切り合いがあり、他は西側に集まって分布する。これらのうち切りあいを整理するとSC03（古）→SC02（新）、SC06・08・11（古）→SC07（新）となり更にSC11（古）→SC8（新）の関係が認められる。SC06と02・03についての判断は他に奈良時代溝（SD04）及び中世期溝（SD01）による切り合いで困難がある。これら8軒の住居址の造営時期については全てに亘って時期決定の出土遺物が出土したわけではないがSC06・07・08住居址より出土した須恵器壺類がIIIb期の特徴を備える点ではほぼ6世紀後半と考えればこの区域の住居址は比較的短期間に建設されたと想定することができ、調査区内における同時併存の住居址は4軒内外と理解することができよう。また床面積はSC02・03・06・07・08・11・13について壁長が各々4m・4m・3.8×3.6m・4.1×3.6m・3.2×2.8m・3.5m以上・4.1×4.4mで方形でないものもあるが16m²・16m²・13.6m²・14.76m²・8.96m²・12.25m²以上・18.4m²となる。これらは住居の上部・屋内構造の考慮なしに簡単に比較することは危険であろうが第I期に比べるとかなり小型であるといえる。住居址内部におけるカマドはSC02で北側、SC07で西側、SC08で東側、SC13で北側に付設されており、明らかに南側に付設されたものはない。このことは住居への出入口の方向とあわせて考え得るかも知れない。

3 奈良時代

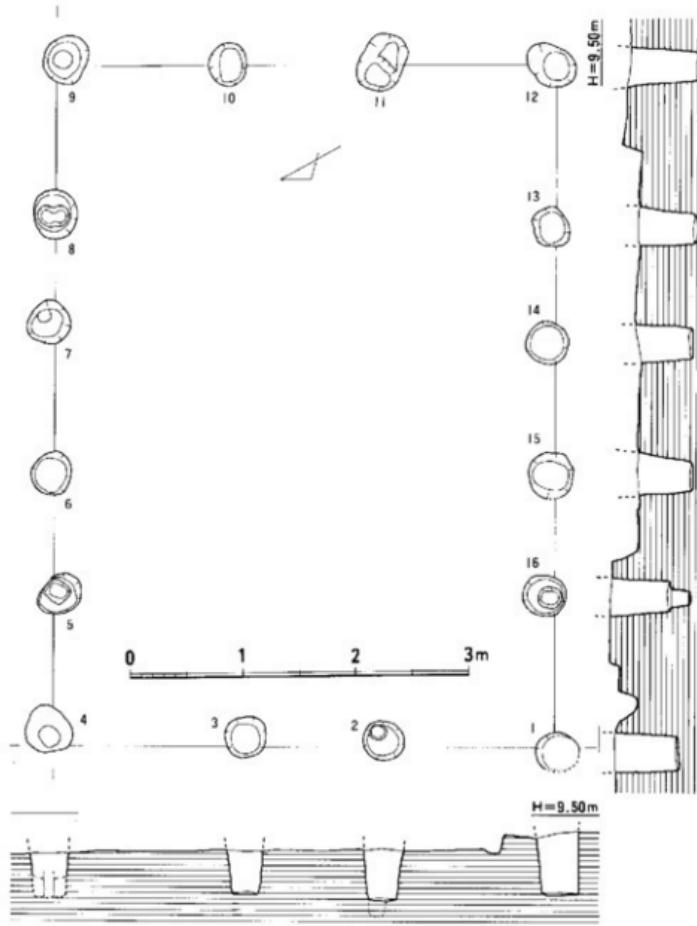
概要—奈良時代に相当すると考えられる遺構は掘立柱建物2棟（SB01・02掘立柱建物）、および溝状造構1条（SD04溝）である。これらは前に調査された五十川赤目遺跡で出土した多量の奈良時代須恵器類と直接連絡する遺構であろうと判断されよう。

① 掘立柱建物

SB01掘立柱建物（第41・42図） SB01建物は調査区中央に検出された東西棟建物である。側柱だけの建物で梁行3間、桁行5間の長方形をなす。柱掘方はSC06・07・08の埋土上面より検出されこれらの埋没後に塗られれている。また中世溝SD01より切られていることに注目したい。掘方の形態と規模は第42図の柱穴番号で列記すれば、1円形・直径37cm・深さ40cm。2・2円形・直径36cm・深さ43.5cm。3円形・直径37cm・深さ38.5cm。4長円形・直径42~44cm・深さ38.5cm。5長円形・直径34~42cm・深さ48cm。6円形・直径37cm・深さ45.5cm。7円形・直径40cm・深さ54.1cm。8長円形・直径34~45cm・深さ51.5cm。9円形・直径44cm・深さ50.3cm。10円形・直径35cm・深さ35cm。11円形（切りあい）・直径37cm・深さ40.5cm。12長円形・直径36~47cm・深さ61cm。13円形・直径35cm・深さ51cm。14円形・直径40cm・深さ45.5cm。15円形・直径40cm・深さ45.5cm。16円形・直径40cm・深さ71cmとなる。梁・桁の実長は梁行4.5m、桁行6.15mをはかる。これは一尺を30cmとして想定すれば桁行は20.5尺、梁行は15尺となるが、桁行はこれを5等分して柱間は4.5尺（1.35m）・3.5尺（1.05m）・4尺（1.2m）・3.5尺（1.05m）・5尺（1.5m）となる。また梁行は15尺を3等分して柱間は5尺（1.5m）・



第41図 奈良時代遺構分布図 (1/200)

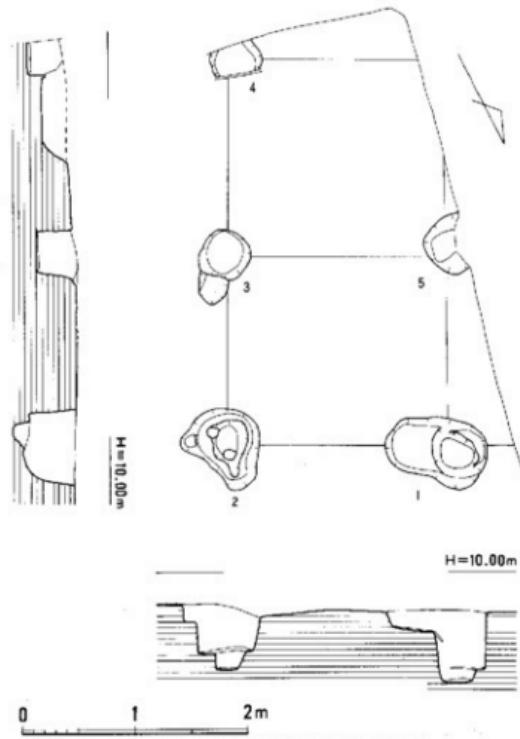


第42図 S B 01 振立柱建物実測図 (1/50)

4尺(1.2m)・6尺(1.8m)の配列となっている。また建物の方位はN-60°45' -Wとなり磁北よりかなり西にふれているが柱筋の通った良好な建物である。振方内からは殆ど時期を想定できる遺物は出土しなかった。

S B 02振立柱建物（第43図） S B 02建物は調査区西南部隅に検出された。南西側は調査区外となり全体像を窺えない。柱振方は図中のうち3・4が削平が大きい。残る柱振方からする

とこの建物は 2×2 間以上の大柱建物(倉庫)であろう。因みに柱掘方の形態と規模は1長円形・直径80~70cm・深さ63cm、2不整円形・直径75cm・深さ55.8cm、3円形・直径45cm・深さ51.5cm、4円形・直径45cm・深さ32.5cm、5円形・直径55cm・深さ20cmを測る。掘方2の柱は重量のため少し座んでいる。柱間の実長は1→2間は210cm、2→4間で360cm、3→5間は210cm、1→5間で180cmをはかることができる。これを1尺を30cmとして除すと南北方向の柱通りになる2→4間は6尺・6尺、東西方向の柱通りにあ



第43図 S B 02 植立柱建物実測図 (1/50)

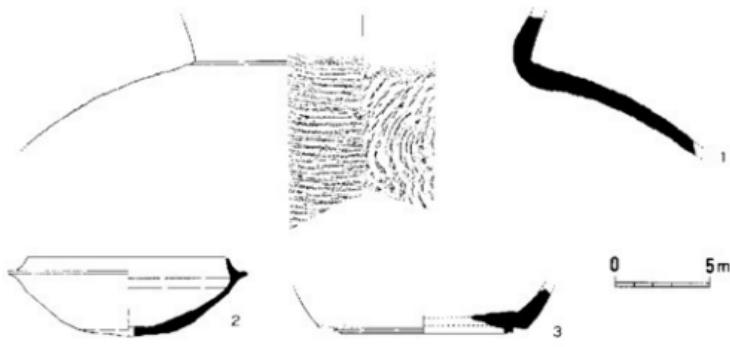
たる2→1間は7尺となる。また3→5間・1→6間もそれぞれ7尺・6尺となって符号する。建物主軸は4→2柱掘方を南北線とするとN-27°-Eとなり、磁北より東に27°ほどふれる。柱掘方内からは1・2で弥生式土器と考えられる土器細片が出土したのみである。

今回調査区で確認されたこれらの遺構は後述する溝遺構とともに奈良時代生活址の構成をなすものと考えられる。更に時期を限定できないが調査区北東部分で多数の柱穴群が検出された。併し建物としてまとまらなかった。

② 溝状遺構

S D 04溝（第3図） 本溝は調査区中央部を南北に走る溝で幅30~40cm・深さ30cmをはかる断面V字形をなす。溝内より弥生中期大甕・須恵器類が出土した。溝はSC02-03-04-05住居址を切る。

出土遺物（第44図） 1～3ともに須恵器である。1は大型甕で外面ヨコの荒い叩き目調整器色淡灰色。2は壺身である。受部立あがりは低く、内傾する。体部下半ヘラケズリ。口径10.5cm、器高4.2cm。3は高台付壺である。高台は壺下端部の内側にあって低い。



第44図 S D 04溝出土遺物実測図（1／3）

4 中世期

概要 今回調査地点は五十川遺跡群をのせる丘陵東縁部にあたると考えられ東側には冲積地が広がる。中世期に相当する遺構は埋土内より該当遺物類の出土は多くなく図に供し得るものはないといえる。検出遺構は東端部の段落ち西側に溝遺構3条（S D01・02・03溝）、段落ち下（東側）では段おち部に平行して走る溝遺構2条（S D05・06溝）と掘立柱建物2棟（S B03・04）である。以下個別に説明と検討を加えたい。

① 掘立柱建物

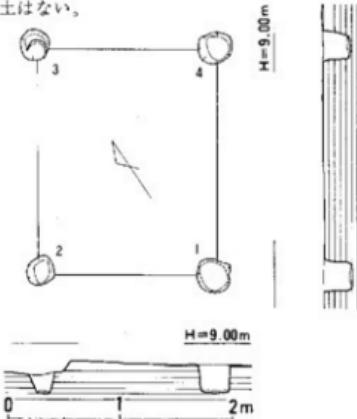
調査区内で東端部段おち以西は緩やかに上昇する傾斜地となるが、このうち南西部・北東部に良好な柱穴群があり、攪乱ビットなどと区別しながら調査中に検討を加えたが結局建物としてのまとまりをつかむことのできるものはなかった。建物は段おち下の削平面（旧水田面）下で1×1間・1×2間規模のものが各1棟検出された。何れもきわめて小規模の建物であるが位置関係から造営時期に前後差があると考えて良い。また何れも柱礎方がS D05・06溝の溝底に残るが向溝の掘下げ時に埋土上での切りあいを確認することが困難であったため前後関係については明確に出来ない。南側に隣接する赤目遺跡調査でも中世期に相当する井戸址などが検出されたといわれこれらをとり込んで構成される集落が東部に広がる可能性もある。



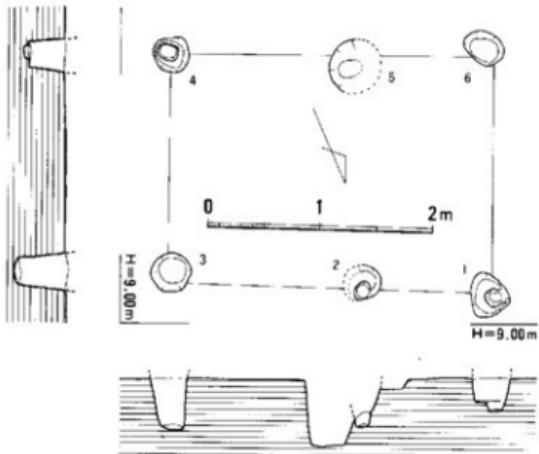
第45図 中世期遺構分布図 (1/200)

S B 03掘立柱建物（第46図・図版12） 東端部段おち下に残る 1×1 間規模の建物であり、東西方向に向く。東西柱間長（1→2柱掘方）は210cmをはかり、南北柱間長（2→3柱掘方）が150cmとなる。これを1尺を30cmとして除すと東西・南北柱間長は7尺・5尺の割合となる。柱掘方は全体に削平を受けたためか小型で浅い。その形状・規模は1円形・直径30cm・深さ24.5cm。2円形・直径30cm・深さ24.5cm。3円形・直径27cm・深さ16cm。4円形・直径27cm・深さ13cmをはかる。柱掘方内より遺物の出土はない。

S B 04掘立柱建物（第47図・図版12） S B 03建物に隣接する東西棟建物である。側柱だけの建物で梁行1間・桁行2間の長方形である。実長は桁行が3m・梁行2.1mを測る。これを1尺が30cmとして除すと桁行は10尺を二分して4尺・6尺になす。また梁行は7尺となる。柱掘方は他に該当するものが見当らずまた削平を受けている。掘方の形態規模は1不整円形・直径35cm・深さ28.5cm。2円形・直径30cm・深さ32.5cm。3円形・直径35cm・深さ46cm。4円



第46図 S B 03掘立柱建物実測図 (1/50)



第47図 S B 04攝立柱建物実測図 (1/50)

形・直径33cm・深さ36cm。
5円形・直径45cm・深さ
31.5cm。6長円形・直形
35~30cm・深さ29cmをは
かる。建物の主軸方向は
N-60°15' - Wをとる。
柱掘方埋土はS D 06溝の
ものと同様の淡灰褐色粘
質土であるが掘方内から
は全く遺物類の出土はな
く、柱痕跡は確認できな
かった。また掘方1・2
では荷重のため底部に柱
状のくぼみが認められた。
この建物はS B 03 建物

と同様に廃絶後に地下げなどの工事によって削平された可能性がつよい。

② 溝遺構

溝遺構は東側段おち西側丘陵部で3条 (S D 01~03) および段おち東側でこれに沿って2条 (S D 05・06) が検出された。S D 01溝は調査区中央部を南北に走る溝で幅80~85cm、深さ10cm足らずを残す。S D 02溝は調査区東部にあってSC 09住居址を切っている。幅65cm・深さ10cm程度の規模をもち、黒褐色粘質土の埋土中より高台付士師壙・壺類の小破片が出上している。S D 03溝はS D 02溝の南5.7mに平行し、幅55cm・深さ10cm程度をはかる小溝である。段落ち線に併行するS D 05溝は幅60cm・深さ30cmの規模で埋土中より青磁器碗破片が出土した。S D 06溝はこれの南側3mに平行する浅い溝で幅1m・深さ7~10cmをはかる。遺物類の出土は無かった。

中世期の遺構については全体的に時期比定の為の資料が十分でなかった。

IV まとめ

これまで五十川遺跡群第3次調査において検出できた弥生時代前期末～中世期に亘る各時代の生活遺構について個別に説明を加えてきた。今回の調査は範囲の上でそれほど広いものではなく、従って前記の様な各時代の集落址の一端を露出できたにすぎないといえる。また過去2次に亘る遺跡群内の調査も同様であるがここでは今回知り得た各時代の遺構について箇条的に記すことによりまとめとしたい。

弥生時代では円形竪穴住居址一軒が検出されたにすぎないが弥生時代前期末より中期に移行する時期の一般的な平面的形態に符号しており、周辺部に袋状貯藏穴を伴った竪穴住居址群の拡がる可能性がある。

古墳時代は前記の様に2時期に亘る遺構群が区別された。第1期は古墳時代前期と考えられる。方形竪穴住居址4軒・井戸址6基・土塙1基などがあり、各々は平面的に切り合いをもたない点で有機的関連をもつて機能したものであろう。しかし同時に何基の井戸と住居址が存在したかについては出土遺物の制約があつて十分に検討することができず特定するに至っていない。この時期の竪穴住居址ではベッド施設を有し、主柱穴2個でこの間に扉を持つほかに「カマド」をもつ例が近年増加しているが、少くとも今回検出例にはこれをもつものはなきそうである。また井戸址は全て素掘りであつて、標高8.3～8.6m付近の鳥栖ロームと八女粘土との境目あるいはこれ以下に湧水がみとめられた。この井戸址の状況は調査地点を含む那珂丘陵・板付丘陵などの中位段丘上で特徴的である。板付丘陵では同時期の井戸は見当らないが丹塗磨研長頭壺を伴った弥生時代中期後半から後期の井戸が北側丘陵の外縁部を中心として分布している。弥生時代のものは鳥栖ロームと八女粘土と境が湧水によって大きく抉れて袋状をなしている。また那珂丘陵では弥生時代集落址で知られる比恵遺跡で観者である。比恵遺跡では1938(昭和13年)年以来これまで7次に亘る発掘調査が行なわれた。このうち第1次調査では弥生時代中期に属するとされる環溝住居址1号内より2基の井戸址が検出された。また1981(昭和56年)年の第5次調査では中期後半の丹塗袋状口縁長頭壺を出土した井戸址3基が検出された。^(註1) 続く1982(昭和57年)年の第6次調査では50基におよぶ多数の井戸址が検出された。時期的にはその初源が弥生時代中期にあり、後期のものが最多であつてそのおわりを古墳時代前期(布留式併行期)に認めることができる。更に1983(昭和58年)年の第7次調査でも弥生時代中期後半～古墳時代前期の井戸址が検出された。これら井戸址の検出された4地点は何れも丘陵東縁部に位置して穿井地点としては望ましい場所である。ところでこれまであげた井戸址は大旨弥生時代中期後半に穿井がはじまり古墳時代前期で中止される傾向にあると考えて良いが、何故弥生時代中期後半以前には例がなく、また古墳時代前期以降に消失するのかという点について

は諸々の理由があるものと考えられる。居住人口の増減による水利用の変化に伴うものあるいは丘陵外縁部の生活址における一般的特性としての在り方などが理由としてあげられようか。何れにもせよ豎穴住居址・井戸・土塙でなる第1期からほぼ一世紀の空白をおいて第2期にあたる後期（6世紀後半）に再び集落が出現した。この時期の豎穴住居址は第1期に比べて小振りであって、しかも主柱穴4個を持ち、カマドを付設する画一性をもっている。住居址内出土遺物には制約があったが一部不明をのぞいて須恵IIIb期のものであって各々の住居址の時期差はそれほど認められず、比較的短期間に推移したものと考えられる。従って同時期に調査区域内で併存し得るのは4軒内外の住居址であろうか。またこの時期の住居址のうちSC07・08住居址床面より小鉄滓が出土しており、周辺地域に製鉄関連の遺構のある可能性を認め得る。

古代（奈良時代）では掘立柱建物（3×5間など）2棟および溝1条が知られた。この時代は律令制に基く条里制地割によってこれまでの自然集落に加えて人为的な集落形成が新たになされた地域があると考えられている。この五十川遺跡群を含む那珂条里区はその南北線方位がN-37°-Wであるところからその基線となるものは水城大堤と考えられており、従ってこの地区の施行時期は水城築堤（664年-天智天皇3年）以後とされる。条里地割の具体的な例証となるものはこの地域では多くなく、板付遺跡G-8a調査区で道路状遺構の両側に溝が付設されたものの、那珂久平遺跡で鴻臚館式軒丸瓦・奈良後期の須恵器を伴った溝遺構が検出されている。これらは何れも調査区が小範囲ではあるが同方位に連なり今後この地区的条里地割の復元にあたって有用となろう。ところで今回検出した建物・溝などはこの条里方位と関連をもつものはなさそうであり、丘陵部に地割作業が及ばなかったことを示すものであろうか。

中世期では掘立柱建物2棟・溝遺構5条などが見付かったが前記の様に遺構間には若干時期差を認める事が必要である。建物は小規模であって集落の主体となるものではないであろう。1971年（昭和46年）第1次調査のA地点は今回地点の南西側550mにあたるがここでは12~13世紀に比定される豎穴住居址3棟・井戸址1基・溝7条・大小ピット・柱穴・溝状遺構などがあつて同時期の集落構成内容の一端が窺えた。

註

- 註1 鈴山雄「原始日本民族の采集形式」、「日本考古学研究委員会研究報告第11号」、1940年、「日本原始集落の研究」、「歴史第16巻2号」、1940年。
- 註2 1981年（昭和56年）調査で井戸址とともに弥生中期-古墳時代初期に亘る豎穴住居址42軒、弥生時代掘立柱建物23棟などが検出された。
- 註3 「北畠遺跡 第6次調査・遺構編-」、「福岡県埋蔵文化財調査報告書第94号」、1984。
- 註4 1983年（昭和58年）調査で弥生中期住居址・溝文柱建物が検出された。
- 註5 日野尚志「筑前国那珂郡・湯谷・柏原・卯笠四部における采集について」、「佐賀大学教育学部研究論文集2011」、1975。
- 註6 「板付周辺遺跡調査報告書(6)」、「福岡市埋蔵文化財調査報告書第83号」、1982。
- 註7 1983~84年（昭和58~59年）の調査で奈良時代溝遺構とともに弥生時代後期大井垣・古墳時代前段水田址などが良好な状況で検出された。
- 註8 「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」、「福岡主婦会文化財調査報告書第32集」、1975。

図 版

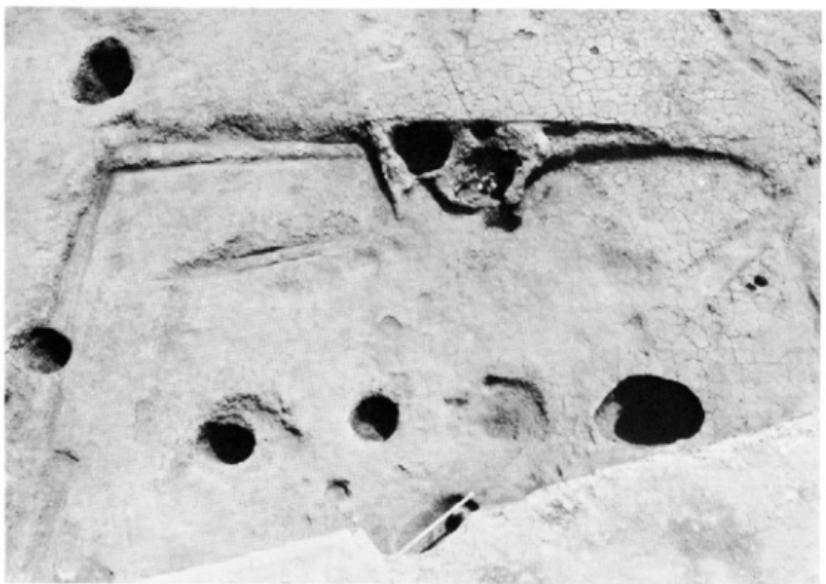


1



2

1. 調査区東半部遺構出土状況 2. 同西半部遺構出土状況



1. 調査区西半部遺構全景

2. S C01住居址出土状況



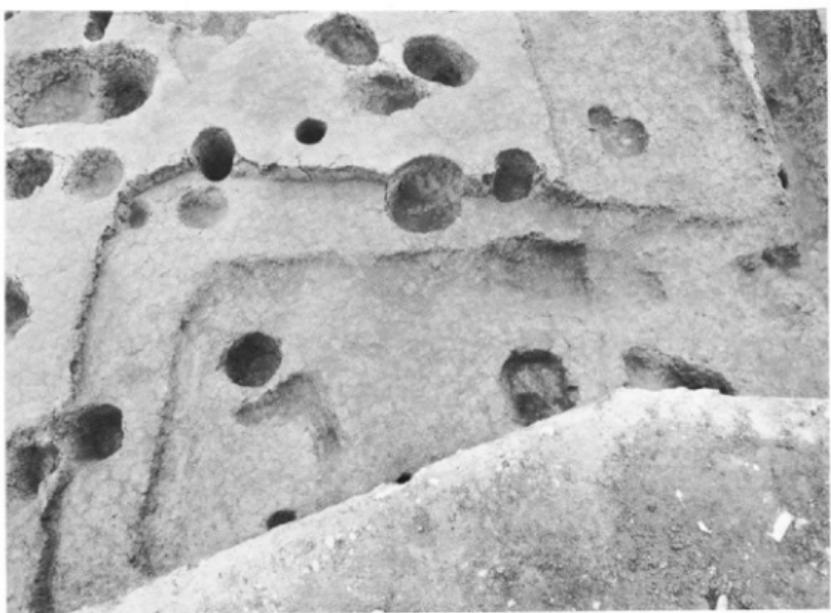
1. S C 02-03-06住居址出土状況

2. S C 02住居址カマド出土状況

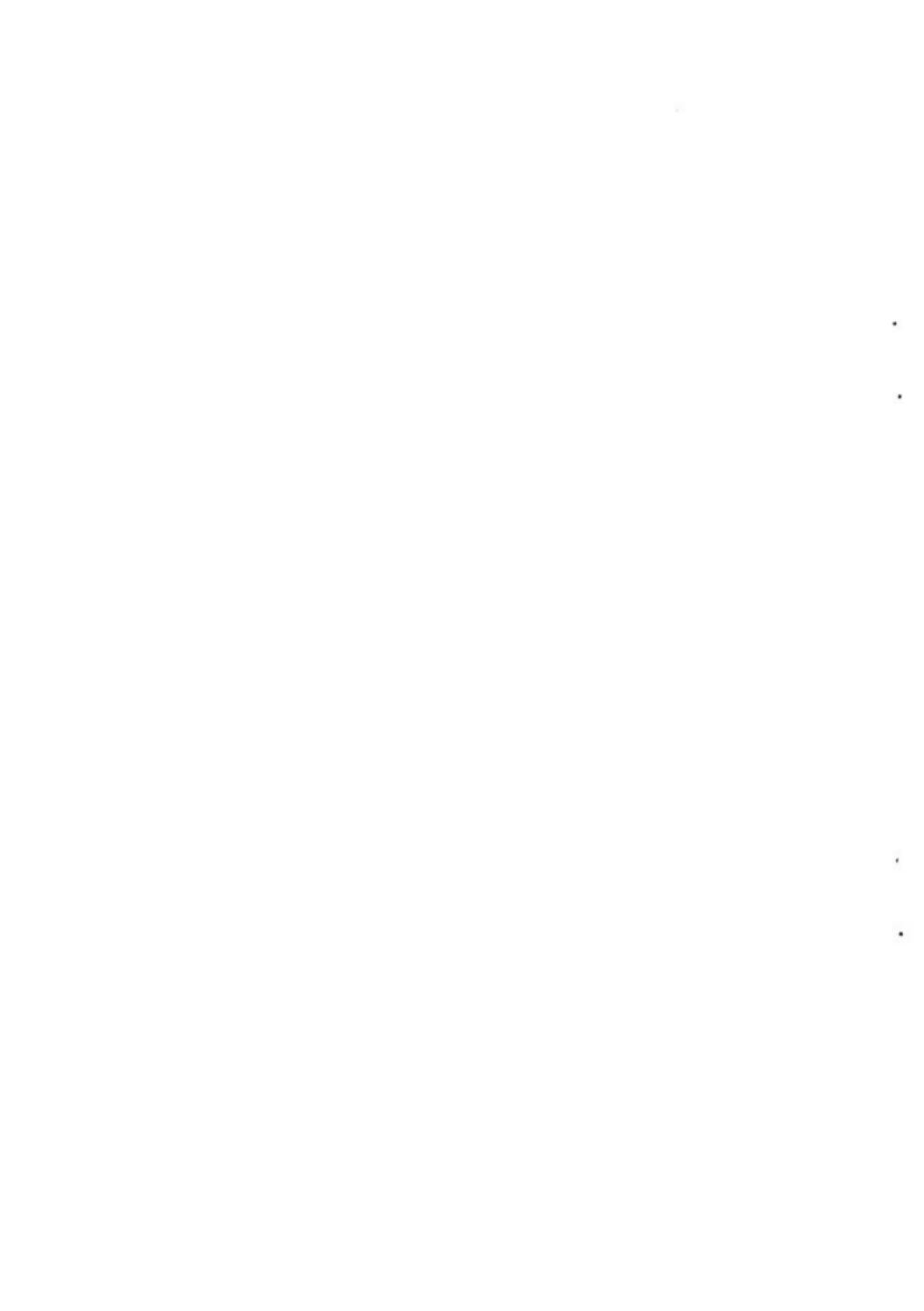


1. S C 04住居址出土状況

2. 同住居址内方形土坑出土状況

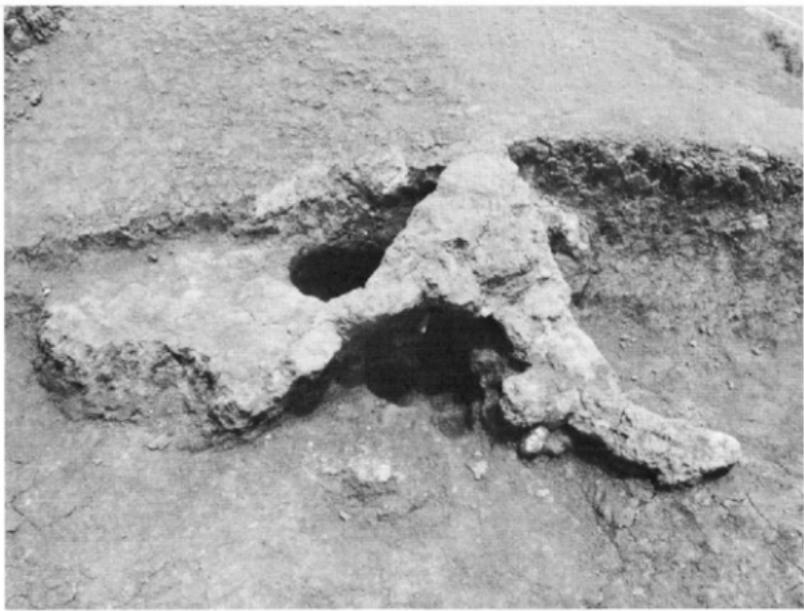


1. S C 05住居址出土状況 2. S C 04-06-07-08-11住居址出土状況



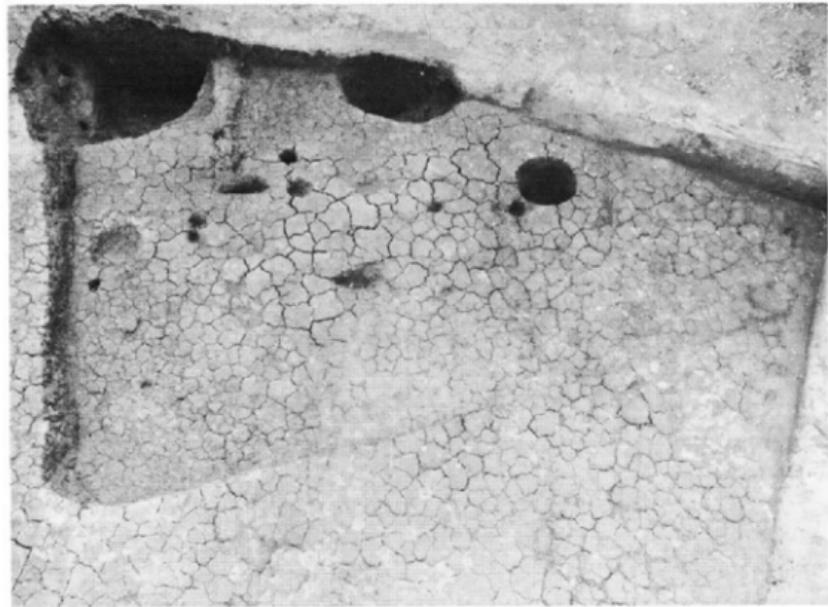
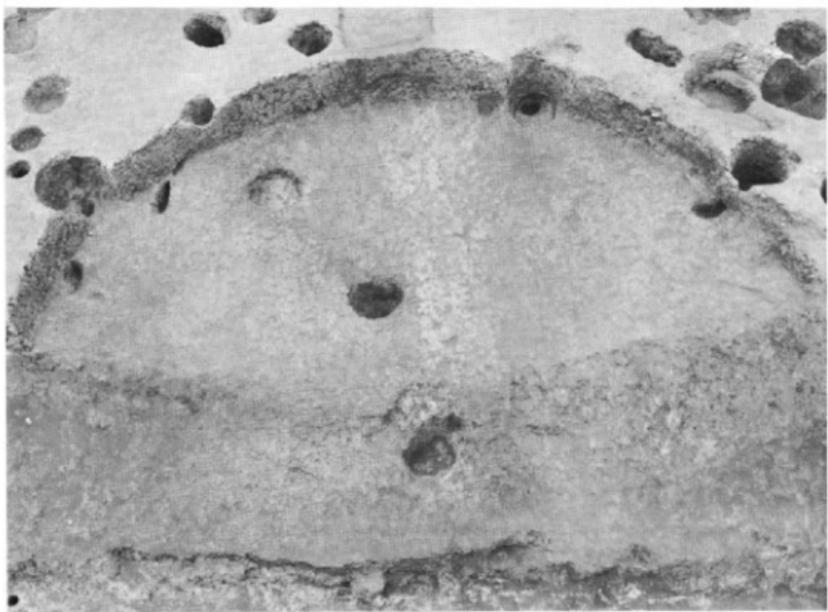


1

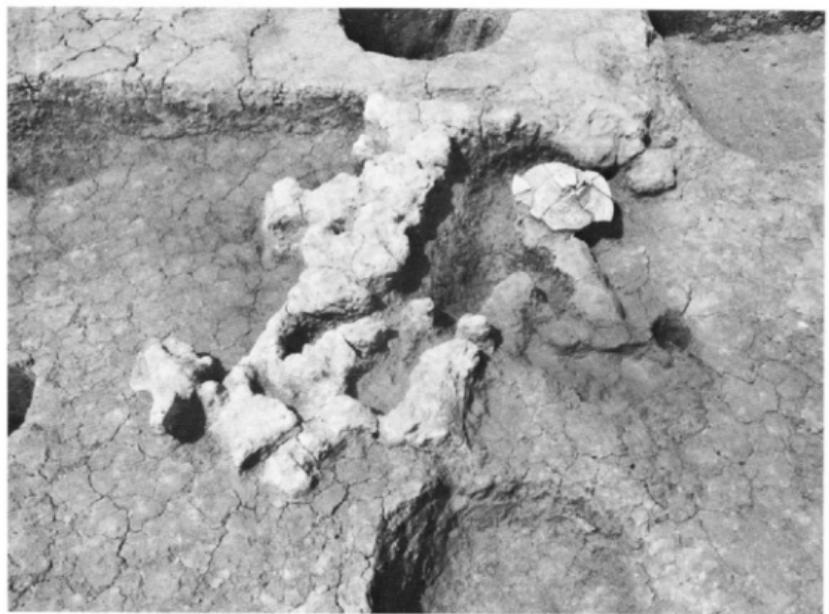


2

1. S C 07住居址カマド出土状況 2. S C 08住居址カマド出土状況

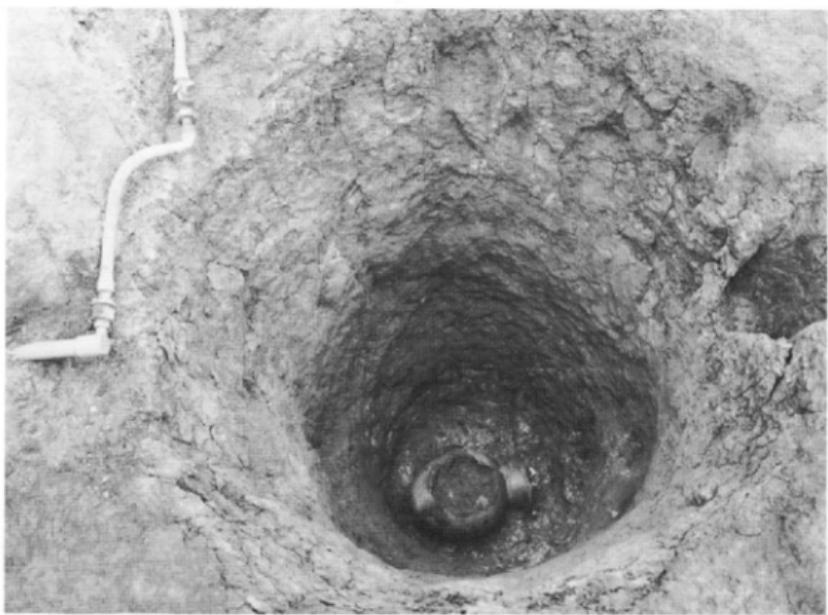


1. S C 09住居址出土状況 2. S C 12住居址出土状況



1. S C13住居址出土状況

2. 同住居址カマド出土状況



1



2

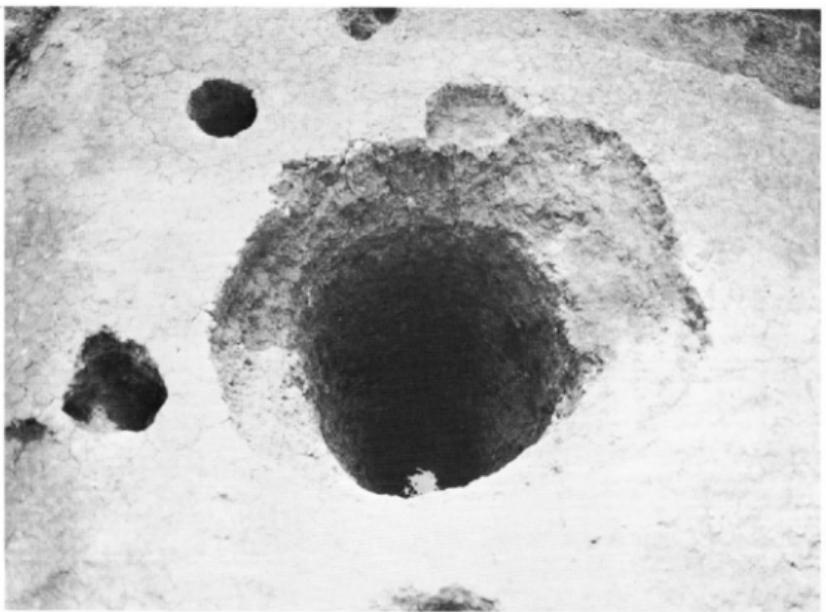
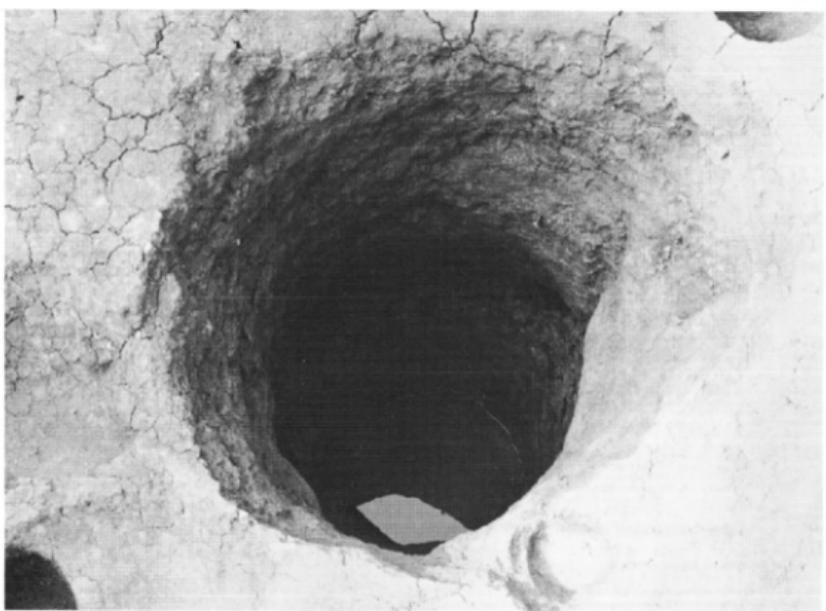
1. S E 01井戸址出土状況

2. S E 02井戸址出土状況



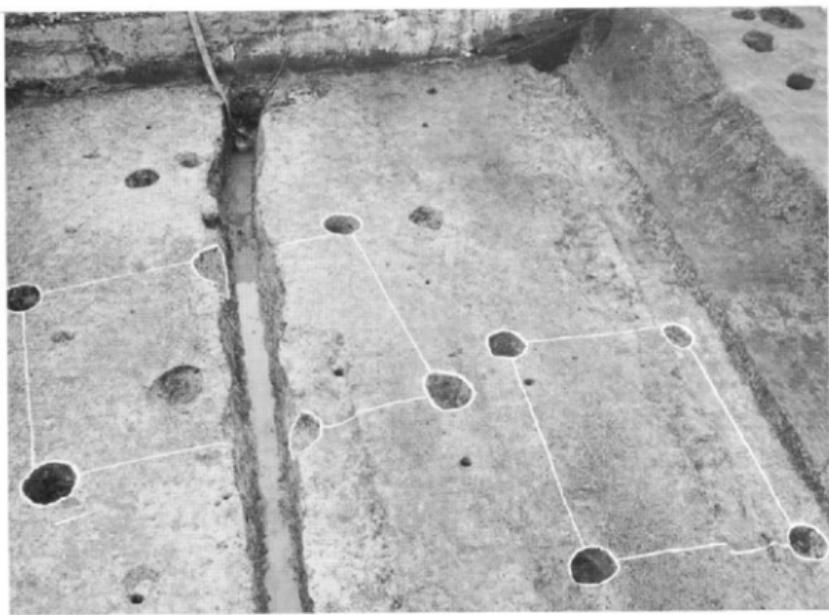
1. S E 03井戸址出土状況

2. S E 04井戸址出土状況



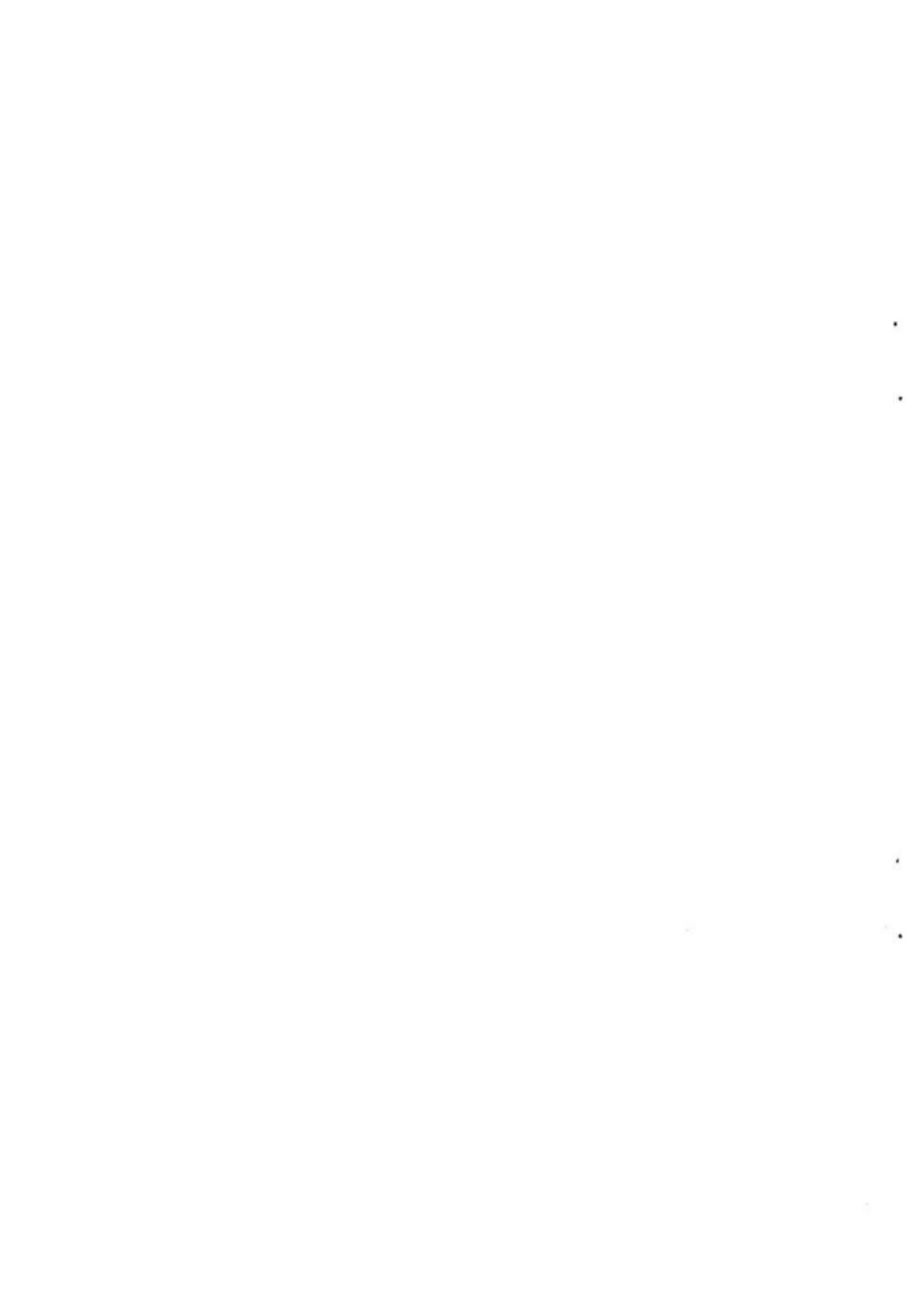
1. S E 05 井戸址出土状況

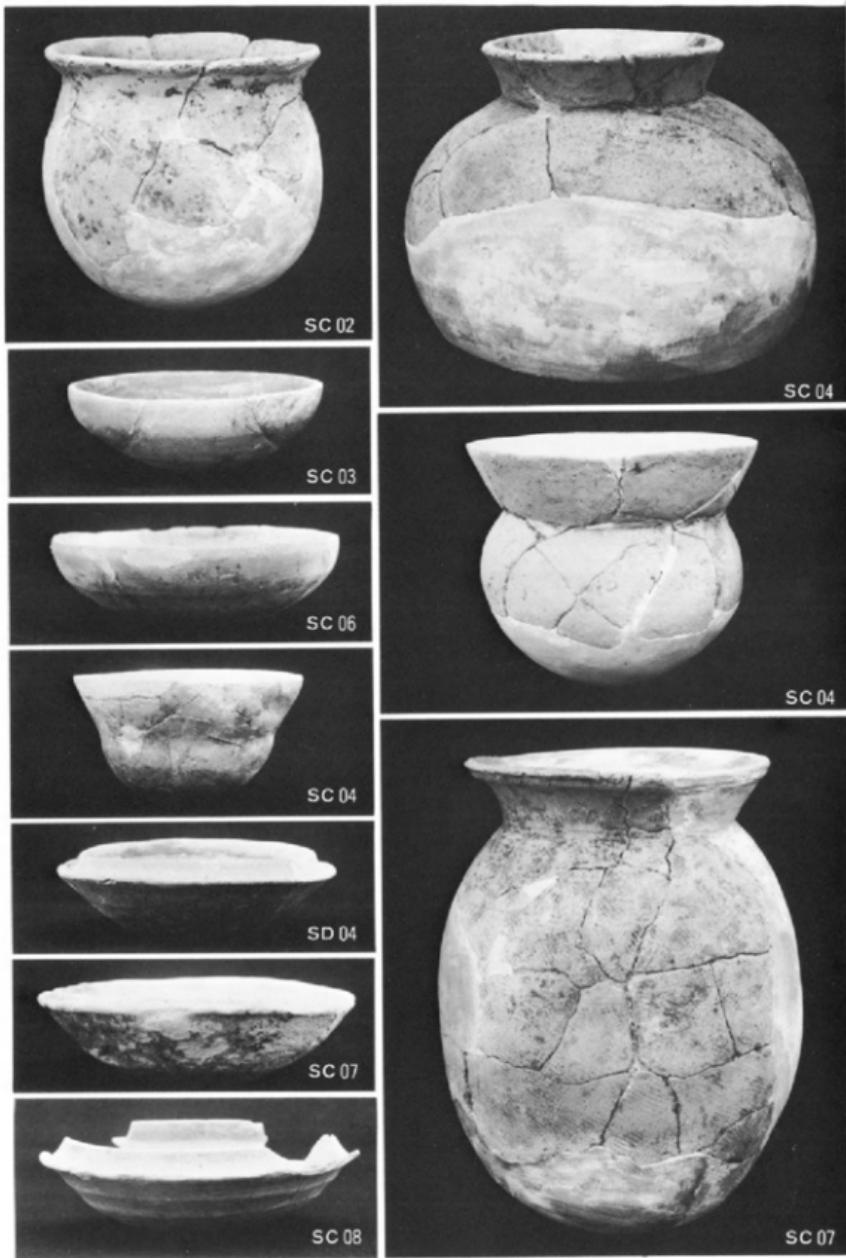
2. S E 06 井戸址出土状況



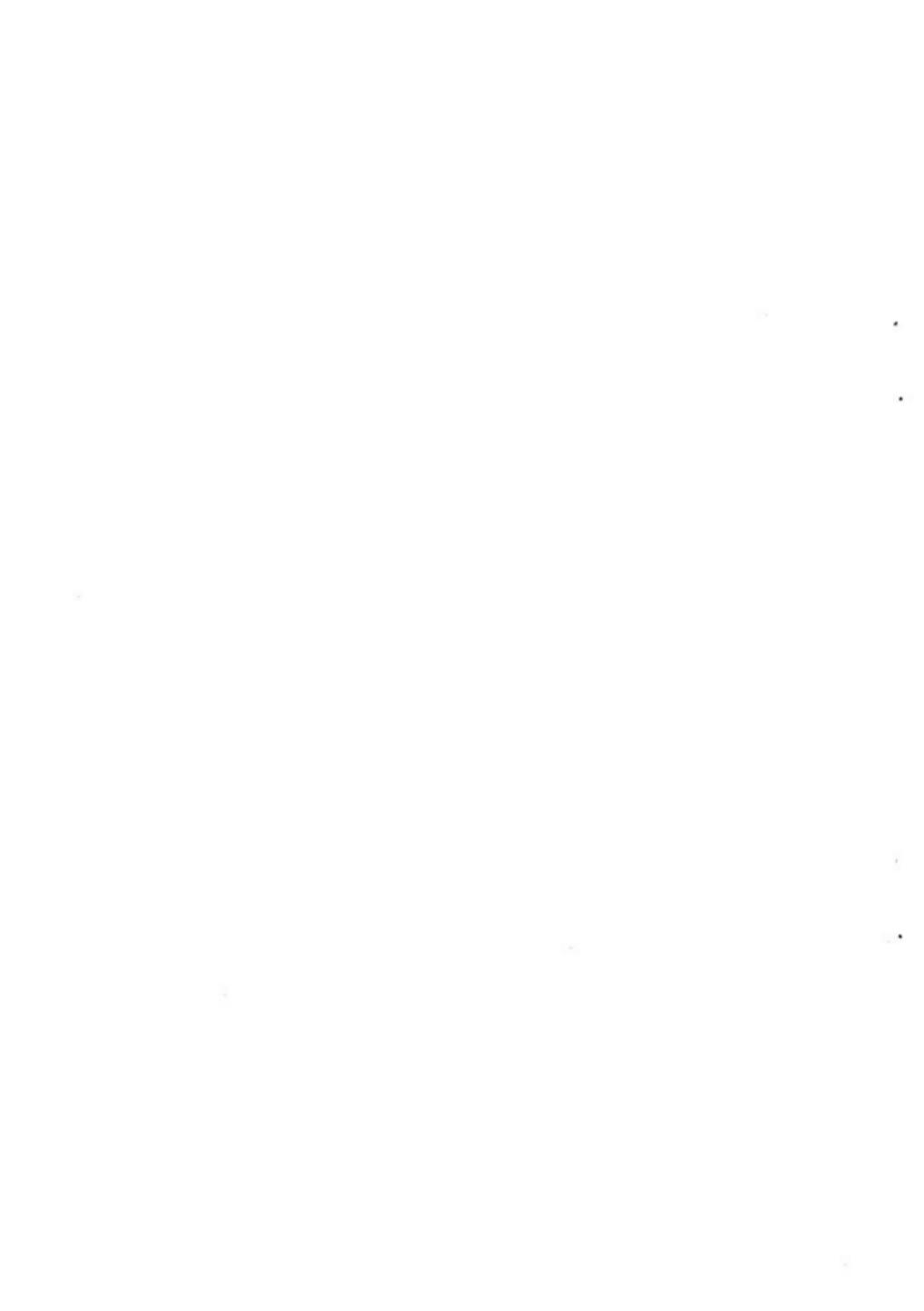
1. SK01土坑出土状況

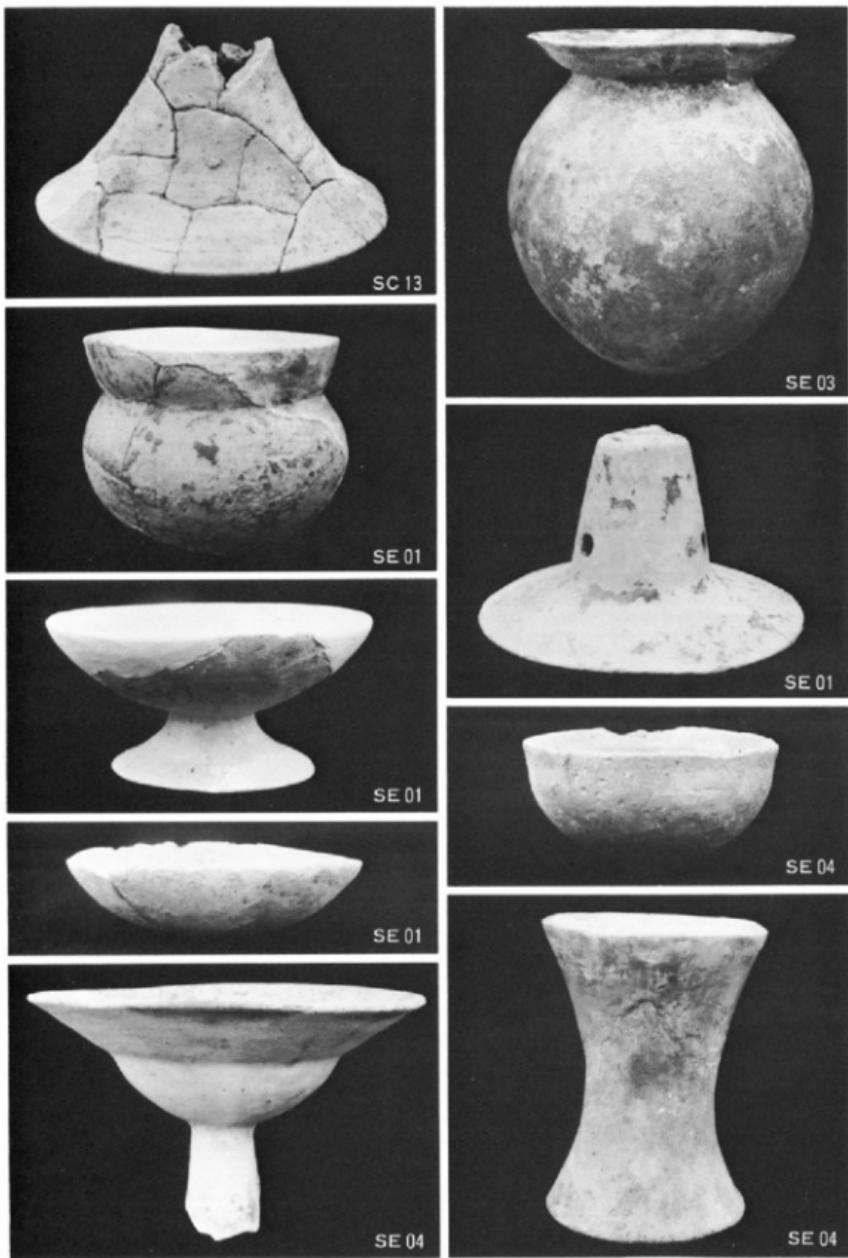
2. SB03-04掘立柱建物出土状況





出土遺物 (i)





出土 遺物 (2)

Table 1. Summary of the results of the simulation study.

Number of observations	Number of variables	Number of variables		Number of variables	
		1	2	3	4
100	1	0.000	0.000	0.000	0.000
100	2	0.000	0.000	0.000	0.000
100	3	0.000	0.000	0.000	0.000
100	4	0.000	0.000	0.000	0.000
200	1	0.000	0.000	0.000	0.000
200	2	0.000	0.000	0.000	0.000
200	3	0.000	0.000	0.000	0.000
200	4	0.000	0.000	0.000	0.000
500	1	0.000	0.000	0.000	0.000
500	2	0.000	0.000	0.000	0.000
500	3	0.000	0.000	0.000	0.000
500	4	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	1	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	2	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	3	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	4	0.000	0.000	0.000	0.000

Note: The numbers in the table are percentages of times that the null hypothesis was rejected.

Table 2. Summary of the results of the simulation study for the case of a linear model.

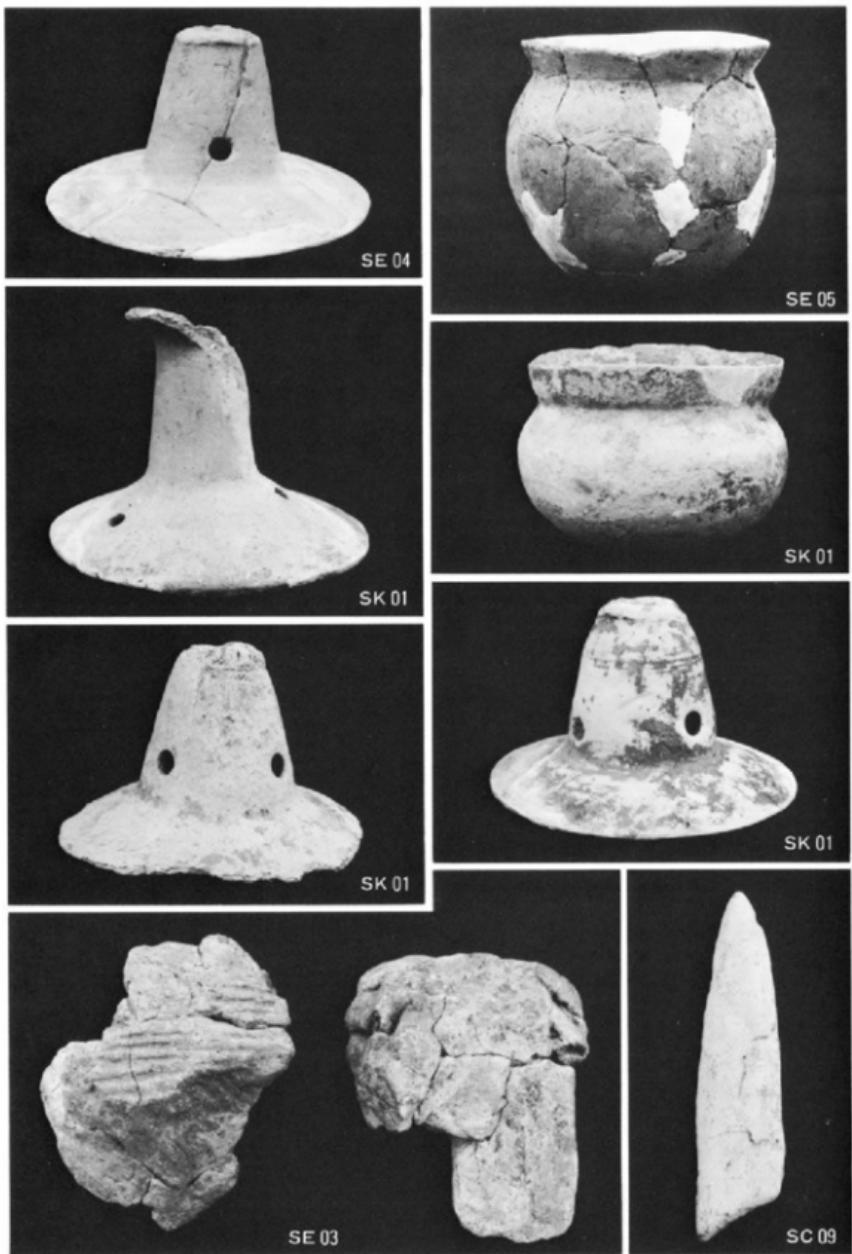
Number of observations	Number of variables	Number of variables		Number of variables	
		1	2	3	4
100	1	0.000	0.000	0.000	0.000
100	2	0.000	0.000	0.000	0.000
100	3	0.000	0.000	0.000	0.000
100	4	0.000	0.000	0.000	0.000
200	1	0.000	0.000	0.000	0.000
200	2	0.000	0.000	0.000	0.000
200	3	0.000	0.000	0.000	0.000
200	4	0.000	0.000	0.000	0.000
500	1	0.000	0.000	0.000	0.000
500	2	0.000	0.000	0.000	0.000
500	3	0.000	0.000	0.000	0.000
500	4	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	1	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	2	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	3	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	4	0.000	0.000	0.000	0.000

Note: The numbers in the table are percentages of times that the null hypothesis was rejected.

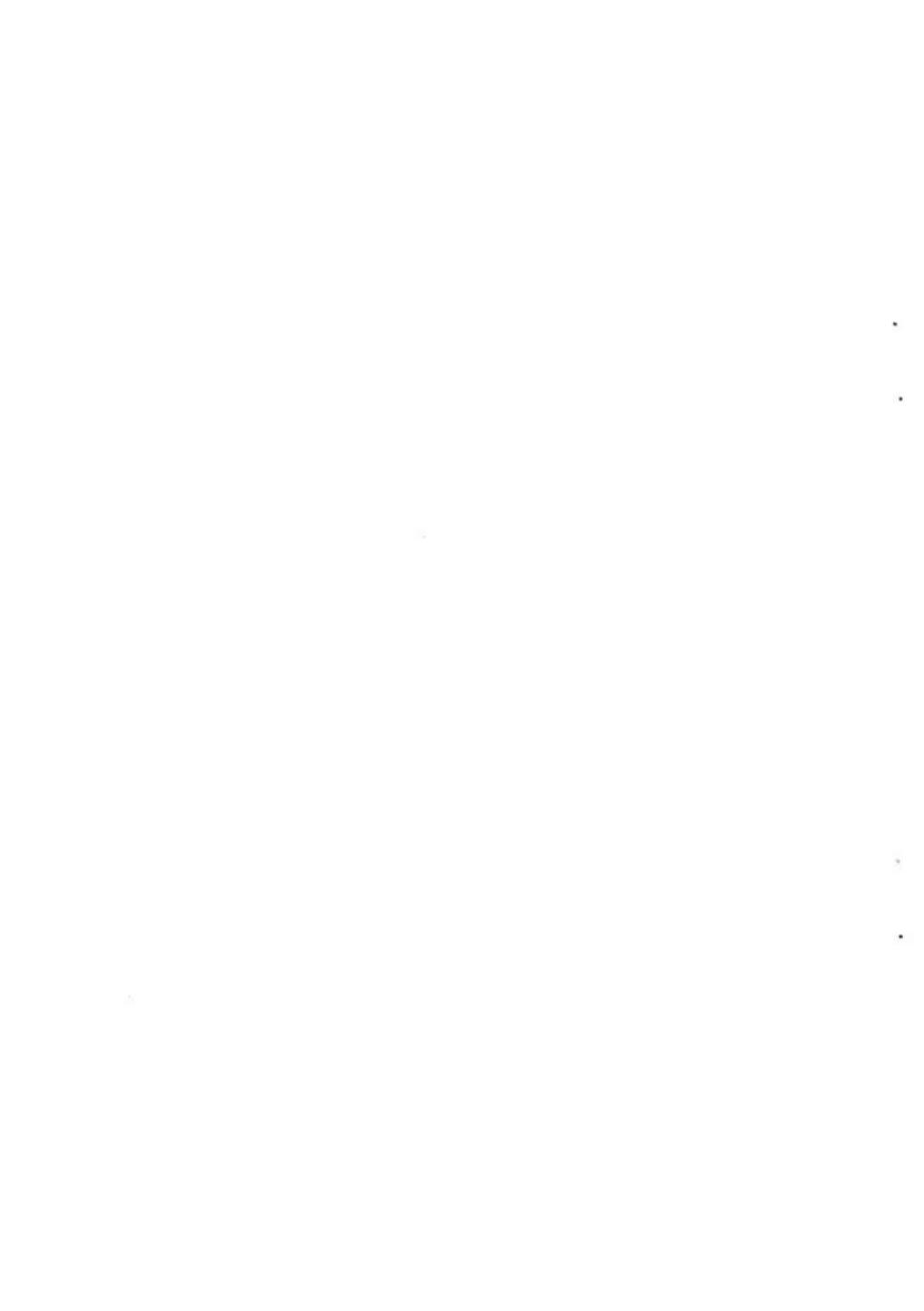
Table 3. Summary of the results of the simulation study for the case of a quadratic model.

Number of observations	Number of variables	Number of variables		Number of variables	
		1	2	3	4
100	1	0.000	0.000	0.000	0.000
100	2	0.000	0.000	0.000	0.000
100	3	0.000	0.000	0.000	0.000
100	4	0.000	0.000	0.000	0.000
200	1	0.000	0.000	0.000	0.000
200	2	0.000	0.000	0.000	0.000
200	3	0.000	0.000	0.000	0.000
200	4	0.000	0.000	0.000	0.000
500	1	0.000	0.000	0.000	0.000
500	2	0.000	0.000	0.000	0.000
500	3	0.000	0.000	0.000	0.000
500	4	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	1	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	2	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	3	0.000	0.000	0.000	0.000
1000	4	0.000	0.000	0.000	0.000

Note: The numbers in the table are percentages of times that the null hypothesis was rejected.



出土遺物 (3)



井尻美松町遺跡



1984

福岡市教育委員会

本文目次

Iはじめに.....	1
1 発掘調査にいたるまで.....	1
2 発掘調査の組織と構成.....	1
3 遺跡の立地と環境.....	3
II 調査の記録.....	7
1 調査の概要.....	7
2 溝状遺構.....	7
3 土 壤.....	9
4 包含層の遺物.....	12
石器・土器・瓦.....	12
III おわりに.....	16

—— れ い げ ん ——

1. 本書は福岡市教育委員会が、福岡市南区井尻一丁目111-1、112-1において実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 本報告書に使用した方位はすべて磁北方位であり、真北からの偏差は、西偏 $6^{\circ}21'$ である。
3. 遺構は呼称を記号化し、土壤をSH、溝をSDとした。
4. 本書に掲載した遺構の実測と写真撮影は飛高・横山・小林が分担して行ない、遺物の実測、製図、写真撮影は小林が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、飛高・横山の助言を得て小林が行なった。

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）	2
第2図	遺跡周辺地形図（縮尺1/4,000）	4
第3図	発掘区平面図（縮尺1/600）	5
第4図	遺構配置図（縮尺1/150）	6
第5図	S D-01土層図（縮尺1/40）	8
第6図	S D-01出土土器実測図（縮尺1/3）	8
第7図	S H-01・02実測図（縮尺1/30）	9
第8図	S H-04実測図（縮尺1/60）	10
第9図	S H-04出土土器実測図（縮尺1/3）	11
第10図	S H-05実測図（縮尺1/30）	11
第11図	包含層出土石器実測図（縮尺1/2・1/3）	13
第12図	包含層出土土器実測図（縮尺1/3）	14
第13図	包含層出土瓦実測図（縮尺1/4）	15

図版目次

- PL. 1 調査区全景（南から）、調査区全景（西から）
- PL. 2 S D-01全景（南から）、S D-01水溜状遺構
- PL. 3 S H-01、S H-02、S H-03
- PL. 4 S D-01、S H-04、包含層出土土器
- PL. 5 包含層出土石器・瓦

I はじめに

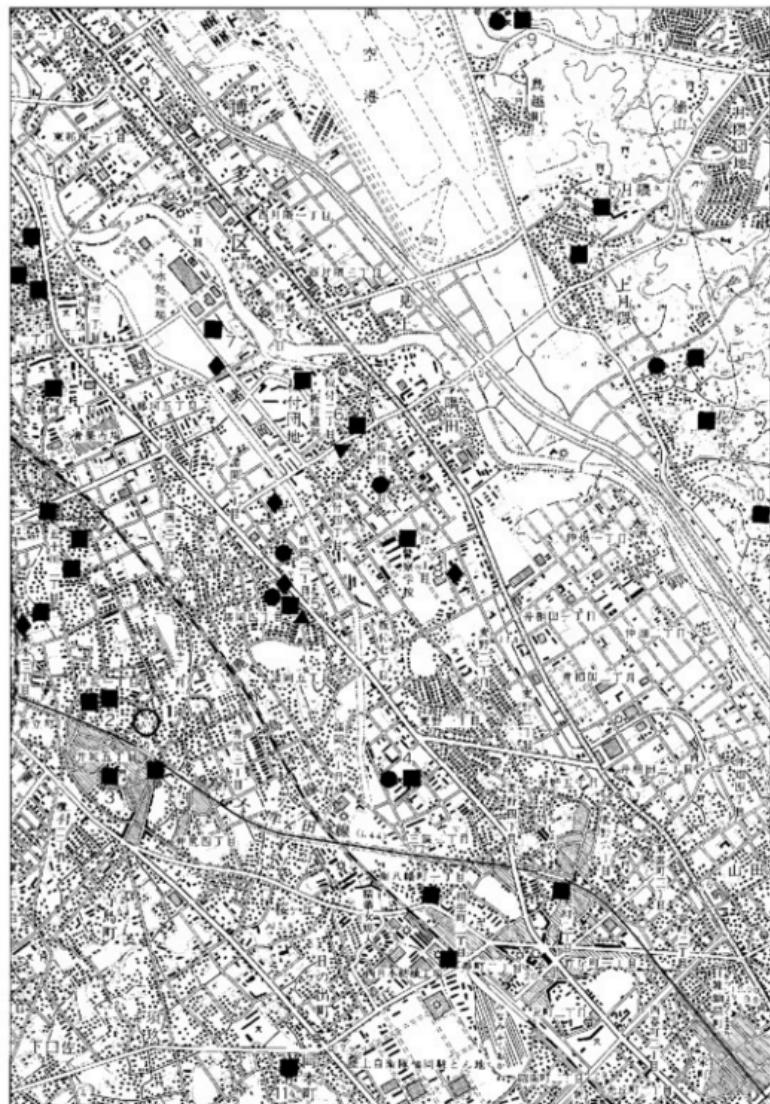
1 発掘調査にいたるまで

昭和56年6月、福岡市南区井尻四丁目4-7の金子久吉氏より福岡市南区井尻一丁目111-1、112-1の1477m²における共同住宅建設に関する開発計画事前審査願が提出された。このため福岡市教育委員会文化課では、周辺遺跡の関連から当該地における埋蔵文化財の有無の確認が必要であるとして、昭和56年8月に試掘調査を実施した。その結果、耕作土下に弥生時代から奈良時代にいたる遺物包含層があり、その下層には南から北へのびる溝状遺構が確認された。当該地が埋蔵文化財の包蔵地であると確認されたことにより、何らかの保存措置を講じる必要が生じ、原因者側と本調査の実施についての協議を行なった。その後数回の協議を重ねた結果、文化財保護への理解と協力を得て、記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。発掘調査は昭和56年9月24日に開始し、途中雨に悩まされながら10月17日に無事終了した。

2 発掘調査の組織

発掘調査から資料整理・報告までのあいだには、数多くの人々の御協力と御支援をいただきました。記して感謝いたします。

調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係
事務担当	折田純孝(第2係長)、古藤国生
発掘担当	飛高憲雄、横山邦雄、小林義彦
調査協力者	井上秀雄、江浜慶一、森 康、谷口正康、大沢 優、野口敏枝、萩野祥子、浜辺和美、武藤資子、吉田紀代美
資料整理	河鍋光子、永利咲江、箱田香代子、青吉良子



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

3 遺跡の立地と環境

井尻美松町遺跡は福岡平野の中央部、福岡市南区井尻一丁目111-1、112-1にあり、井尻B遺跡群の中央部東縁にあたる。遺跡の東には諸岡川・御笠川が、すぐ西には那珂川が北流し、この両河の谷沿いに標高10~30mの中位段丘が分布する。この段丘は阿蘇山のカルデラ形成時に噴出した火砕流によって形成された面であり、その大部分は八女粘土層（白色粘土）と鳥栖ローム（黄褐色輕石質火山灰）として分布する。地形的には須玖の丘陵から井尻・五十川・那珂を経て比恵の丘陵へとのびる中・低位段丘上に位置する。この段丘下に拡がる肥沃な沖積地は水稲農耕の発展と共に重要な生産活動の場となつたろうし、段丘面はこの人々の営む集落の場となつたのであろう。これはこの段丘上のはとんどに高い密度で遺跡が確認されていることからも充分に窺い得る。

本遺跡を中心にして周辺の遺跡をみると、南1.5kmに明治32年に発掘内より前漢鏡・鉄劍・銅鉢・玻璃壁などを出土した須玖岡本遺跡を中心とした須玖丘陵の豪棺墓群が拡がる。東1.5kmに拡がる低段丘上には鉄斧を出土した波渡鉄工所遺跡・弥生時代後期の豪棺・土壤墓群の南八幡遺跡^(注1)、難御隈遺跡・弥生~古墳時代の水田址を検出した三筑遺跡等が点在している。北東1.0kmには豪棺内より貝輪・銅劍を出土し、福岡平野で旧石器文化の包含層が唯一明らかにされている諸岡遺跡群がある。更に、その北には台地上に径110×80mの環濠をめぐらした弥生文化発生期の遺跡として著名な板付遺跡群が拡がる。^(注2)また、北へのびる段丘は那珂・比恵の丘陵にいたって方形の溝をめぐらす集落址で著名な比恵遺跡や春住遺跡等の弥生~古墳時代の遺跡群が拡がり、その中には劍塚・那珂八幡古墳等の前方後円墳も榮かれており、一方、日を井尻B遺跡群内にむければ、すぐ西に弥生時代中期の豪棺墓や磨製石鎌等の出土で知られる井尻栄町遺跡があり、中期の住居址や近年の分布調査で瓦等を採集した地神社遺跡が南に点在している。

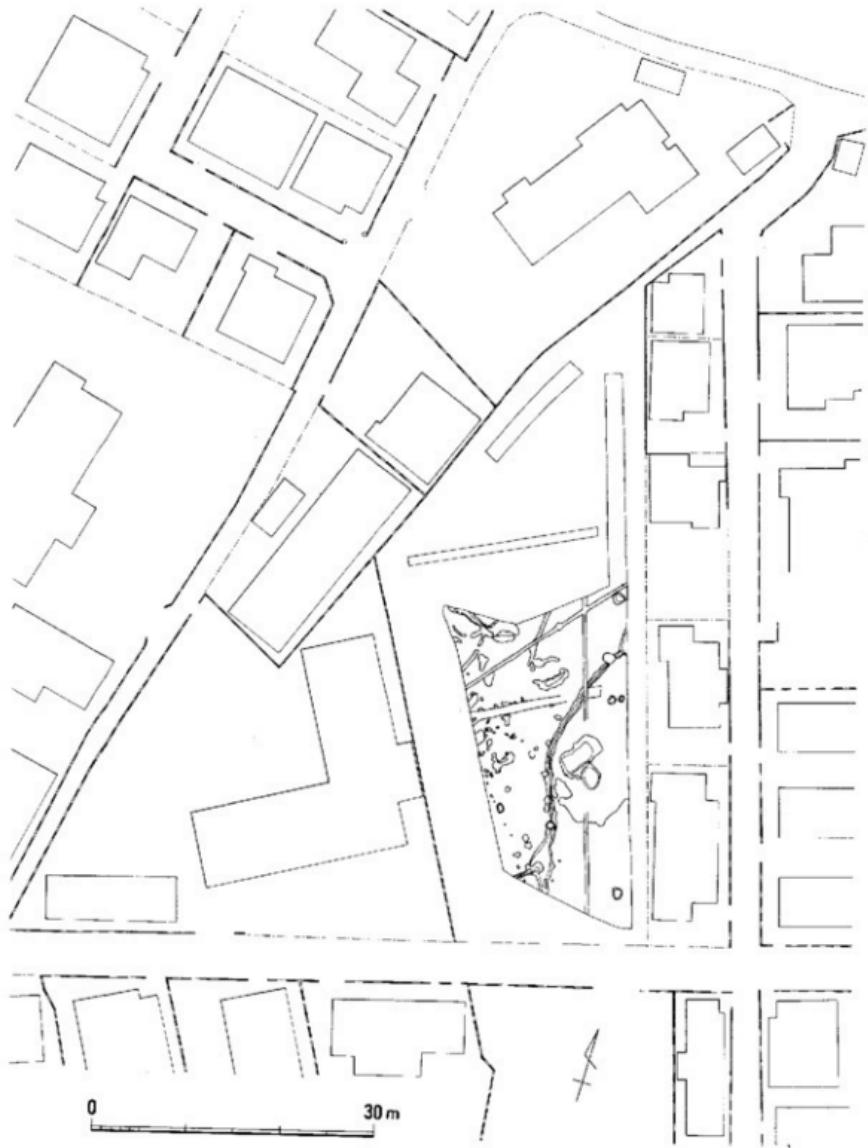
このように本遺跡周辺は、旧石器~繩文時代にかけての遺跡は非常に少ない。これが弥生時代以降になると沖積平野に生産基盤をおく環濠等をもつた幾つかの大集落が出現し、豪棺墓群・貯藏穴群・水田址等々将に「弥生銀座」の感を呈する程に急増する。古墳時代も同様の傾向がつづき古墳も2基の前方後円墳や板付・諸岡に円墳群が点在する。しかし、歴史時代以降になると概して大規模な遺跡は少なくなる。

- ▲ 先土器時代 1 井尻美松町遺跡
- 弥生時代 2 井尻栄町遺跡
- 古墳 3 地神社遺跡
- ◆ 歴史時代 4 一ノ生遺跡
- 5 猿洞遺跡
- 6 板付遺跡
- 7 那珂久半遺跡
- 8 猿住遺跡
- 9 宝納尾遺跡
- 10 金原遺跡
- 11 須玖丘陵遺跡

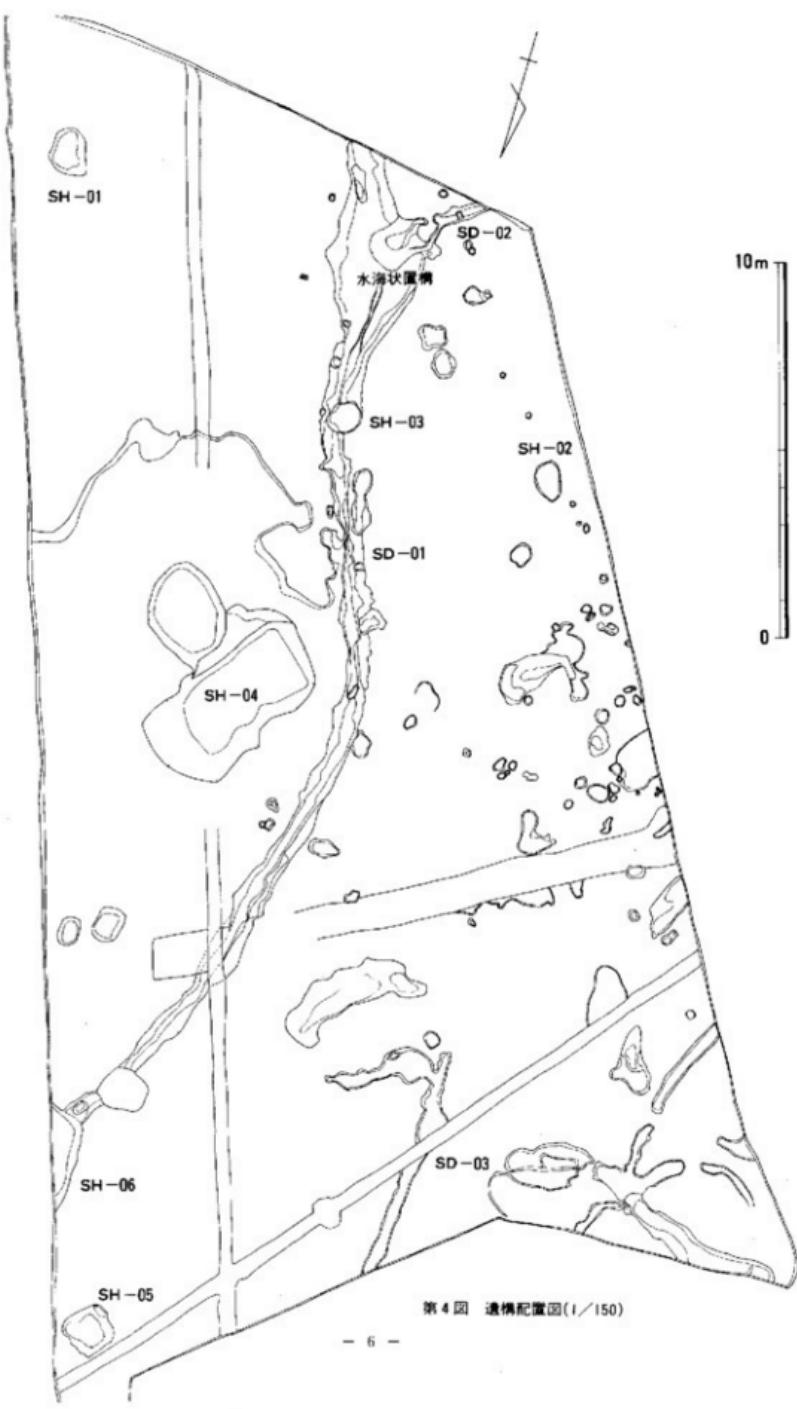
- 注1 福岡市教育委員会編「福岡市文化財分布図」東部 I, 1981
- 2 中山平次郎「須玖豪棺付近に発見せる石塗土塁」(考古学雑誌21-9) 1981
- 3 山崎 桃男「三筑遺跡」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第69号) 1981
- 4 横山 邦郎「板付周辺遺跡調査報告書」(" ") 1974
- 5 杉原 庄介「板付遺跡」(日本農耕文化の生成) 1961
- 6 銀山 勇「鹿島庄屋址跡考--比恵」(九州考古学論叢)



第2図 遺跡周辺地形図 (1/4000)



第3図 免振区平面図 (1/600)



第4図 遺構配置図(1/150)

II 発掘調査の記録

1 発掘調査の概要

発掘調査は、試掘調査の結果、遺構が検出されなかった北側部分を耕土処理場として確保し、対象地1477m²のうち南側のおよそ600m²についてのみ実施した。一方、調査区北側部分については、調査区の東辺に添って全長23mのトレンチと、その西方に全長13mのトレンチを各々設定して、更に遺構の検出に努めたが、厚さ20~30cmの暗褐色土の遺物包含層を確認したのみで、なんらの遺構も検出しえなかった。調査区の現況は休耕水田地であって、基本的な土層堆積は、1層；耕作土、2層；床土瓦層（黄褐色粘質土）、3層；暗褐色土層（遺物包含層）、4層；黒色粘質土層、5層；八女粘土層である。また、SD-01より東側では、4層下に砂粒の混入した茶褐色土層と黒褐色土層の2層が観察され、この中に若干の遺物を含んでいる。3層の遺物包含層は2~30cmと厚く、調査区全域に亘がっており、遺物の量も多い。遺物は弥生時代中期から奈良時代のものまで混在している。この遺物包含層はSD-01（調査区を南から北へ走る）を境として東側ほど厚く堆積しており、恐らくは水田開発等のために西側の微高地が削平され整地されたものと想われる。

遺構は調査区全域にわたって土塙、溝、ピット等を検出したが、概してSD-01より西側に集中する傾向がある。土塙はその平面形が不整形なものが多く、遺物を出土しないものが大部分であったために番号は付さなかった。また、ピットの中には柱穴として良好なものも多少検出されたが、掘立柱建物としてとらえ得るものは一棟もなかった。

2 溝状遺構

溝状遺構は調査区を南から北へとはしるSD-01のほかにSD-02, 03が検出された。このほかには調査区の北西部に数条の浅い溝様のものがあるが、その形状や遺物をまったく含まないことから溝状遺構としてはとり扱わなかった。

SD-01 (第4・5図、PL.2)

本溝はゆるく「S」字状に膨らみながら、調査区の中央部をほぼ南北に縱走する形をとる。北端部はSH-06によって切られ、全長28m以上、溝幅は北側で50cm、南側で1.0mを測り、断面は「U」字状を呈する。溝底は南より北へ40cmの比高差で傾斜する。一方、南端部のSD-02との接合点には長径1.5m、短径1.0m、深さ40cmを測る平面プランが指円形の水溜状遺構があり、溝幅も1.5~2.5mと拡がる。杭列等の施設については何ら検出されなかった。調査区はこのSD-01を境として東側へ緩く傾斜してゆく。このSD-01と02とは一連のものであるが、

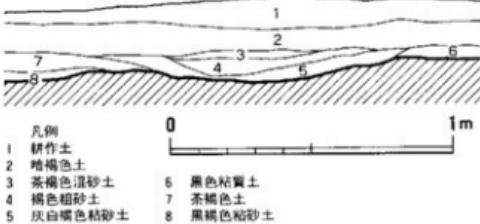
その性格については水田址等に伴う施設なのか、あるいは集落址等に付随する施設なのかは明確ではない。遺物は上層では弥生式土器・土師器が混入しているが、下層ではそのほとんどが土師器で占められる。

$H=12.00\text{m}$

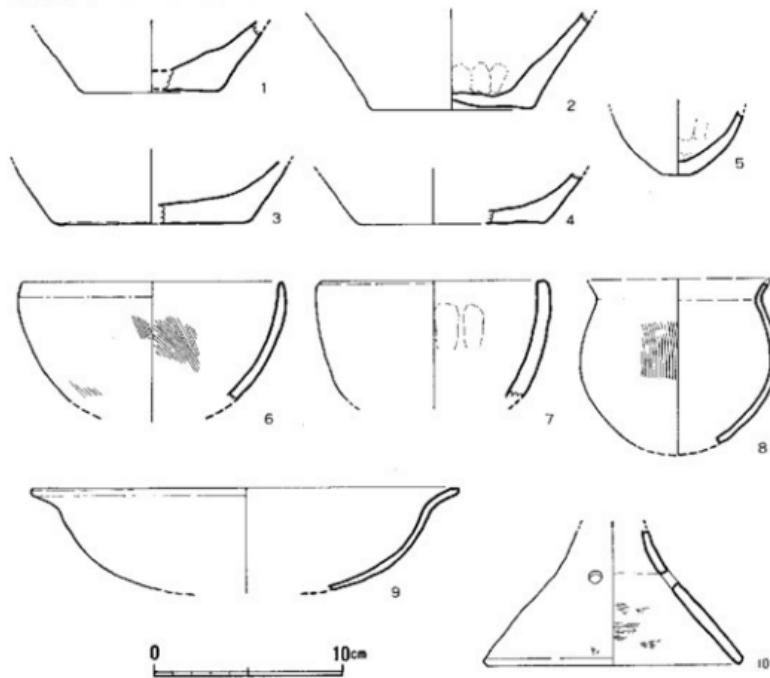
遺物（第6図、PL. 4）

1～4はいずれも弥生式土器の底部資料で、上層より検出した。胎土中には石英砂等を多く含む。

5は小型の壺形土器である。口縁部を欠くが、球形の胴部は径1.6cmの小さな底部へとつづく。胎土・焼成共良好で、調整はナデ仕上げである。6・7・9は鉢形土器で



第5図 SD-01土層図 (1/40)



第6図 SD-01出土土器実測図 (1/3)

ある。6・7は半球形の体部にわずかに内湾気味の口縁部が立ち上がる。復原口径は6が13.8cm、7が12.0cmを測る。9は復原口径22.6cmを測る。体部は浅く、口縁部は緩く屈曲して外方に開く。調整は体部外面がへラ削りの他はヨコナデ・ナデ仕上げである。8は口縁部を欠く小形丸底壺で、球形の胴部には短かく外反する口縁部がつく。胴部外面が削毛目調整の他はナデ仕上げている。胴部最大径は10.5cm。10は脚部がラッパ状に拡がる高杯で、底径13.4cmを測る。外面は継ぎ、内面は横位の刷毛のあとナデ仕上げている。

S D - 02 (第4図, PL. 2)

調査区の南西隅にあり、南西から北東へのびる2m以上の溝である。溝幅40cm、深さ5~10cmで、断面形状は浅い「U」字状をなす。溝底は北東へ10cm程度低くなり、2条に分流してS D - 01の水溜状遺構に流れ込んでいる。覆土は茶褐色の混砂土であるが、溝底には一部で灰黒色粘質土がうすく堆積していた。遺物は土師器小片が若干出土した。

S D - 03 (第4図)

本溝は調整区域の北側にあり、長さ6m以上、幅30cmの南北方向に直線的にのびる小溝である。深さは5~10cmと浅く、溝底は平坦で、溝断面は「コ」字状をなす。覆土は黒色土の単一層で、弥生式土器が少量出土したが、いずれも小片であるために図化できなかった。

3 土 壤

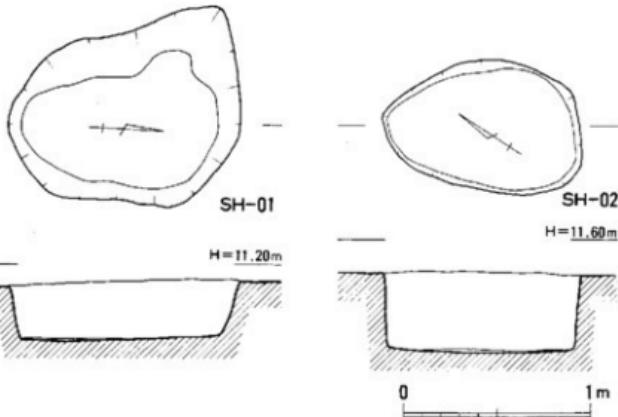
土壤は6基(S H - 01~06)検出した。これらの土壤はその形状もまちまちであり、まとまりにも欠ける。更に、S H - 04より比較的まとまった遺物を検出した他はほとんどなく、それが各土壤の性

格づけに困難

なものにして
いる。

S H - 01
(第7図, PL.3)

調査区の東
南隅に位置す
る。平面形は
長軸方向をほ
ぼ南北にとっ
た長径1.23m、
短径0.9mの
梢円形である



第7図 S H - 01・02実測図 (1/30)

が北西隅が若干張り出す形をとる。壁面は比較的緩く傾斜して立ち上がり、塹底までの深さは30cmである。溝底は平坦であるが、南に向って僅かに低くなっている。覆土は粘質をおびた暗褐色土の單一層で層位の変化はみられなかった。遺物もまったく出土せず、時期・性格とも明らかにしえない。

S H - 02 (第7図、PL. 3)

S H - 03の西方約5mのところにあり、長径1.05m、短径0.7mを測る。平面プランは北側がやや細くなる卵形を呈する。深さ30cmを測る壁面はほぼ垂直に立ち上がり、しっかりとしている。覆土は砂混りの茶褐色土で、層位の変化はなく、遺物は一点も検出できなかった。

S H - 03 (第4図、PL. 3)

調査区の中央部南寄りの位置、S H - 02の東方約5mにあり、S D - 01によって切られている。平面形は楕円形で、長径95cm、短径85cm、深さ40cmを測る。塹底は浅いレンズ状を呈する。覆土は茶褐色砂質土の單一層で遺物は一点も出土しなかった。

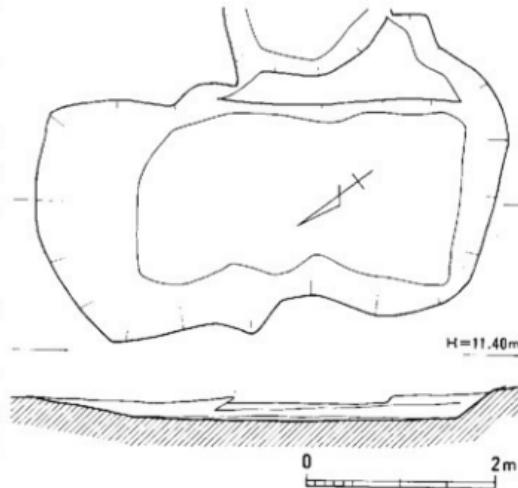
S H - 04 (第8図)

調査区の中央部、S D - 01のすぐ東に隣接してあり、長軸4.8m、短軸2.5mを測る大型の上塙である。平面プランは長方形を呈し、主軸方位をN-38°-Eにとる。壁高は2~30cmで、北壁は緩く傾斜して立ち上がる。塹底は浅いレンズ状を呈する。上塙内の覆土は黒色粘質土の單一層で層位の変化は観察されなかった。本塙のすぐ東隣には長径2.5m、短径1.9mの楕円形プランの浅い土塙があるが切り合いつ

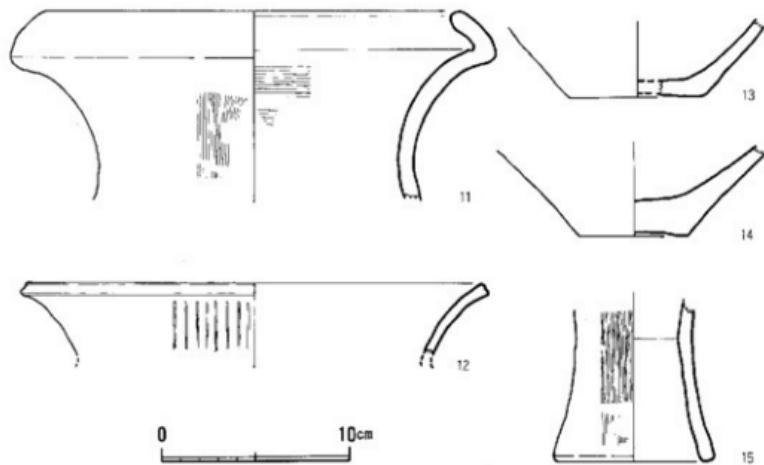
いては明確ではない。同時にS D - 01によって切られた浅いレンズ状の凹(大豊穴?)の中にあり、その検出状況および出土遺物からして、これ等が同時期の一連のものと考えてもさしつかえあるまい。塹底は湧水が著しい。

遺物 (第9図、PL. 4)

11は口径22.2cmを測る、袋状口縁を有する壺形土器である。口縁部は強く屈曲して袋状をなし、外面に緩い棱をつくる。内面の口縁上半部は指で押えた痕跡が残り、口唇部は肥厚する。外面上半はナデ仕上げ、頸部は



第8図 S H - 04実測図 (1/60)



第9図 SH-04出土器実測図 (1/3)

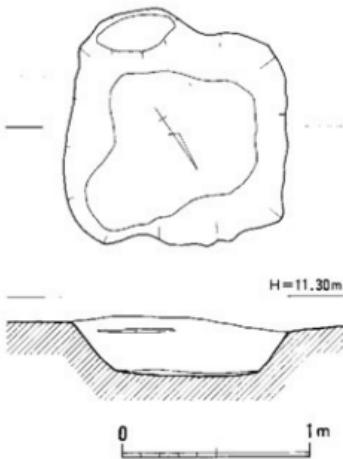
内面がヨコ、外面がタテ方向の刷毛目調整を施す。12は復原口径24.3cmを測る變形上器で、外面には縦方向の暗文を施す。13・14は底部資料である。底径は13が7.0cm、14が5.8cmを測る。いずれも上げ底氣味で、内面には指頭による押圧痕が明瞭に残る。15は底径8.2cmを測る筒形器台である。外面は継刷毛目調整、内面はナデて仕上げている。

SH-05 (第10図)

調査区の北東隅SH-06のすぐ北2.5mにあり、一边が1.15mの方形プランを呈する。墳底プランは上面プランとほぼ同じであるが東側が突出した形状で、浅いレンズ状を呈す。深さは2~30cmで、壁面は東側が急速に立ち上がる他の全体になだらかである。覆土は砂混りの暗茶褐色土層のみで層位的変化はみられなかった。遺物は弥生式上器と須恵器が出土したが、いずれも小破片である。

SH-06 (第4図)

調査区の東南部に位置し、SH-05に近接している。SD-01を切っており、東西幅1.0m、



第10図 SH-05実測図 (1/30)

南北幅2.5mを測る。深さはおよそ50cmで、塹底は舟底状を呈する。東半分が調査区外にあるためにその全容は明確ではないが、遺構の現状からすれば南北に幅広い隅丸の長方形を呈しているものと考えられる。土壤内の覆土は、他の土壤が单一の土層ではなくど変化がなかったのに對し、上から茶褐色粘質土・灰褐色土・灰黒色粘質土の順にレンズ状に堆積していた。遺物は同化できなかつたが弥生式土器と土師器の小片が少量出土した。

4 包含層の遺物

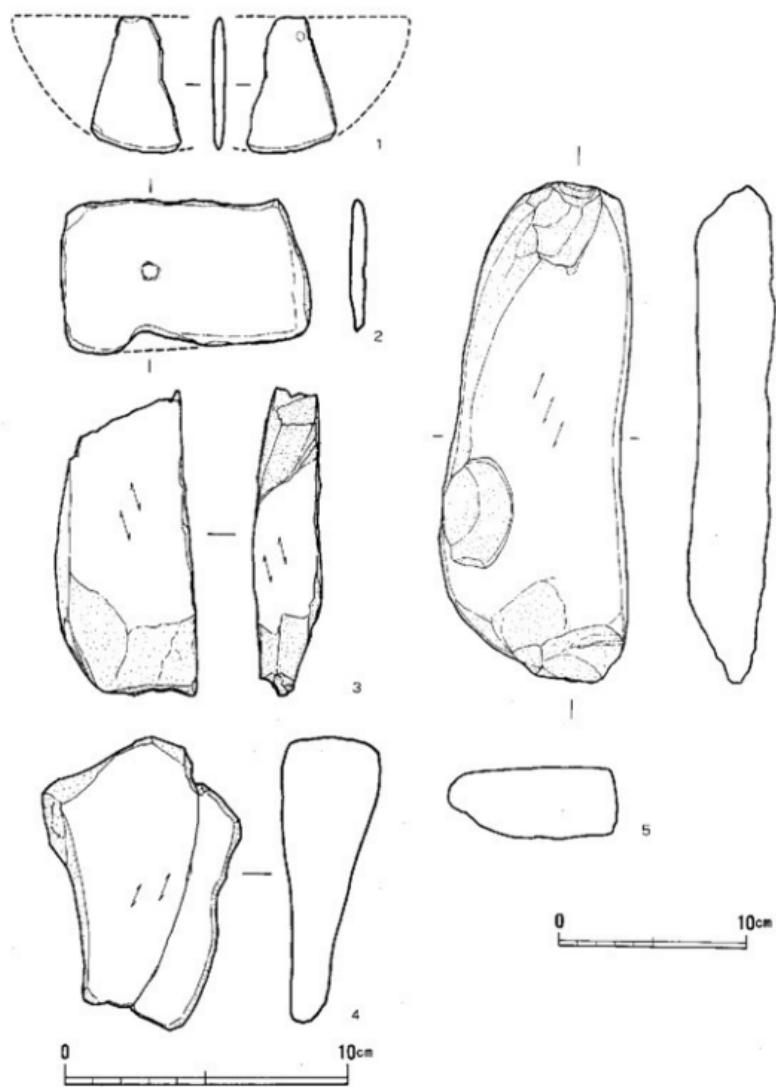
包含層出土の遺物としたものは、溝状遺構・土壤等より出土したものではなく、3層；暗褐色土層と4層；黒色粘質土より出土したもので、その大半は須恵器・瓦で占められる。

石 器（第11図、PL. 5）

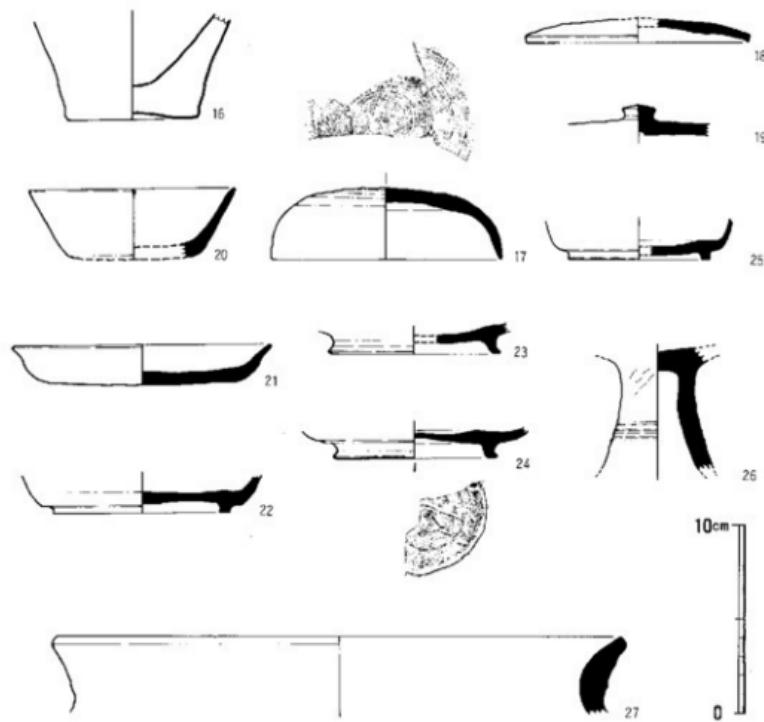
1・2は石庖丁で、いずれも頁岩を石材としている。1は半月形石庖丁で、外彎する刃部は両面より研磨され、背部は直線的である。紐孔は一孔のみが残存し、両側より穿孔されたとみられる。2は直線状の背部と緩く外彎する片刃の刃部をもつ。紐孔は片面より穿っているが完全していない。石庖丁未製品で磨耗が著しい。3は粘板岩質の砥石片である。両側が欠損しているが、2面のよく研磨された砥面が残っている。4・5は砂岩質の砥石である。4は3面の砥面をもち、中央部はうすく凹む。5は全長24.6cmを測る完形品で、3面の砥面をもつ。

土 器（第12図、PL. 4）

16は底径7.0cmを測る弥生式土器の底部資料である。底面は上げ底氣味で、器肉は厚い。17~19は杯蓋である。17は身受けの返りを有さないもので、復原口径12.4cmを測る。平坦な天井部から内縁氣味に口縁部へ移行する。天井部は切離し後に回転ヘラ削りで整形する。天井部にヘラ記号がある。18は天井部が平坦で、口縁部は折り曲げずに端部をわずかにつまみ出して整えている。復原口径は11.8cm。器面は内外面共にナデて仕上げているが、天井部外面にはヘラ削り痕が残る。19は平坦な天井部につまみがつくもので、つまみは比較的扁平なものである。いずれも胎土・焼成はともに良好・堅緻で、色調は灰色を呈する。20~25は坏身である。20は復原口径11.0cm。底部はわずかに丸身をもち、口縁部は丸くおさめている。底部外面がヘラ削りの他はヨコナデ仕上げである。色調は濃灰色。21は口径13.8cm、器高2.1cmを測る。口縁部は緩く屈曲して外反し、端部は丸くおさめている。調整は底部外面がヘラ切離し後にナデて仕上げている他はヨコナデ仕上げである。色調は灰色。20・21とも胎土・焼成は良好・堅緻。22~25は有高台杯で高台の特徴から2分類できる。I類は22・25で、高台が屈曲することなく、断面形が長方形となるタイプである。復原高台径は22が9.4cm、25が7.6cmを測る。底部内面が不定方向のナデ、その他は回転ナデを施している。II類としたものは23・24で、長くのびた高台は端部が外方にはね上がり氣味になるタイプである。復原高台径は23が9.2cm、24が8.8cmを測り、24は底部外面にヘラ記号を有する。いずれも灰色を呈し、胎土焼成はともに良好・堅緻。26は杯



第11図 包含層出土石器実測図 (1/2・1/3)



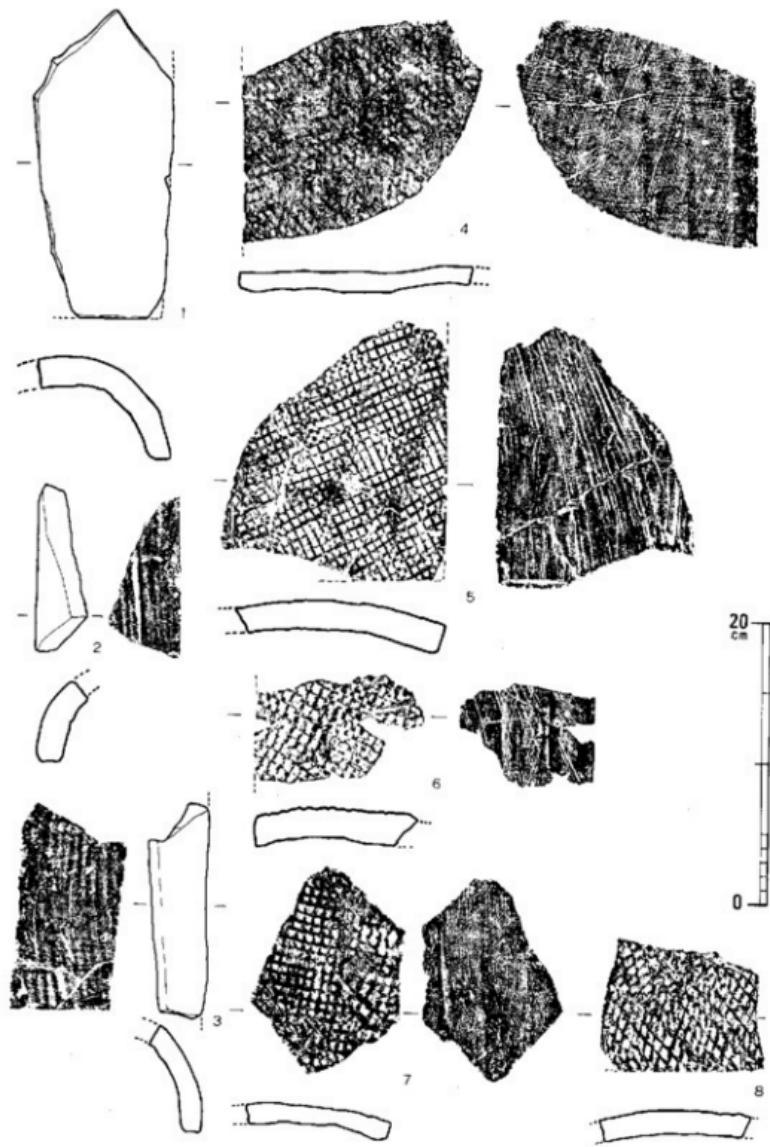
第12図 包含層出土土器実測図（1／3）

部を欠く高杯の脚部資料で、脚柱状部にはしばりを加え、後にナデで仕上げている。脚中央部には浅い2条の凹線がある。胎土・焼成は良好・堅緻で、濃灰色を呈する。27は復原口徑30.0 cmを測る甕形上器の口縁部資料で、肥厚した口縁部は緩く「く」字状に屈曲する。内外面ともにヨコナデで仕上げているが、腹部内面はわずかに同心円文の叩きが残る。

瓦（第13図、PL. 5）

瓦は丸瓦（行基葺丸瓦）と平瓦が出上したが、いずれも破片資料であるためにその大きさ、模骨の規模等はすべて不明である。叩文様は格子目文と他にすり消されたものがある。

丸瓦（1～3）はこの他に4点の計7点が出土したが、いずれも行基葺丸瓦と思われる。凸面には叩き目ではなく、ナデによる調整を施している。凹面には幅5～8mmの凹みが連続して



第13図 包含層出土瓦実測図 (1 / 4)

観察され、竹状の材料を紐で円筒状に組んだ成形台を用いたものと思われる。3には竹材を組んだ紐の痕跡が明瞭に観察される。また、すべてに布目痕がみられる。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は堅固。色調は1が淡黄褐色、2・3は濃灰色を呈す。

平瓦(4~8)の凸面調整手法は叩き目を用い、叩文様は格子目文のみで、それは叩き板の幅方が浅いもの(4・7・8)と深いもの(5・6)また、形態的に正方形格子目文のもの(5~7)、長方形(菱形)格子目文のもの(4・8)等々によっていくつかに細分される。凹面の調整手法はすべてに布目痕があり、5・6・8はその後に削り、ナテによる擦り消しを施している。また、4~7には2.7~3.2cmの幅で連続する板目痕が観察され、桶巻き作りの特徴をもっている。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は堅紙。色調は7が淡灰青色、5・8が灰色、4・6が濃灰色を呈する。

III おわりに

近年、井尻周辺は都市化の波が著しく、旧地形を窺い知ることはほとんど困難である。周辺の遺跡も中山平次郎氏によって報告された井尻柴町遺跡のはかは散発的に遺物が採集されたのみで、本格的な発掘調査は実施されておらず、その全体的な様相についてはほとんど把握されていない。そのため井尻B遺跡群に於ける本遺跡の位置づけは困難である。また、遺跡周辺の微高地は西鉄大牟田線の線路敷設工事や新田開発等による著しい削平を受け、遺構の遺存状況も良くはなかった。それ故に、遺跡の性格及び周辺の全容解明は今後の成果を待ちたい。

本遺跡では土壤と溝状遺構を検出したが、微高地の東縁にあたるため遺構の数は少なく、その時期・性格等を明確にしえるものも少なかった。そのうち、SD-01と02とは本来一連の構と考えられ、台地の東縁にそって緩く蛇行しながら北へ流れている。水溜状遺構及び溝内には杭列等の施設はなく、農業用水路とは考え難い。次に、包含層出土の瓦は同様の瓦が南へ250mの地祇神社内でも採集されている。地祇神社は井尻台地の最高所に位置し、この周辺にこれ等の瓦を葺いた何等かの建物群があったことが想定され、今後瓦を葺いた建物址が発見される可能性をもっている。また、本遺跡は老司系瓦を出土した三宅庵寺と高畠庵寺とを結ぶ線上のほぼ真中にあり、同時に那珂郡衛の推定地(?)とされる那珂久平遺跡周辺とを結ぶ三角形の底辺に位置することは福岡平野を貫流する那珂川の水利を合せ考へると非常に興味深い。

発掘調査から2年6ヶ月が経ち、多くの人の援助を得て冊子になりました。自身の勉強不足から遺跡・遺物に対する検討が不充分であったことは認めざるを得ず、その反省から事実のみを報告し、他の問題は今後の課題として取り上げていきたいと想います。

図 版



▲ 発掘区全景（南から）

▼ 発掘区全景（西から）





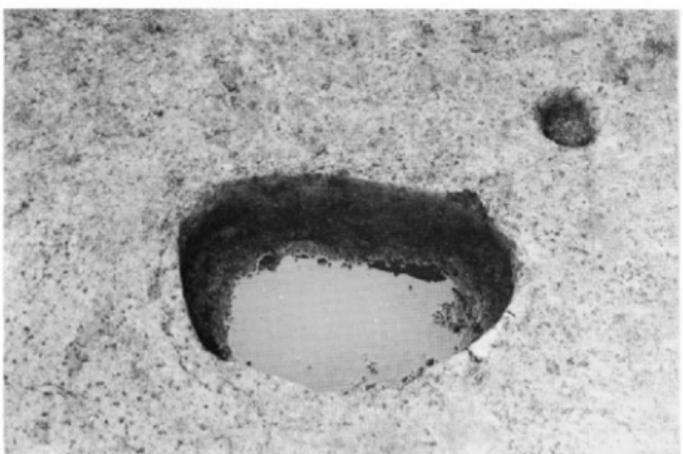
▲ SD-01

▼ SD-01水湿状遺構



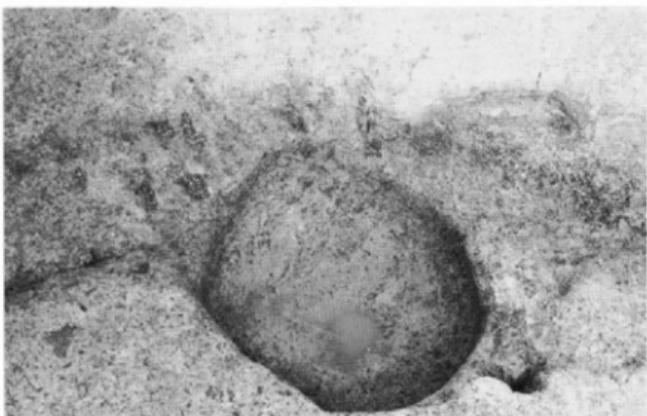


▲ S H -01



▲ S H -02

▼ S H -03

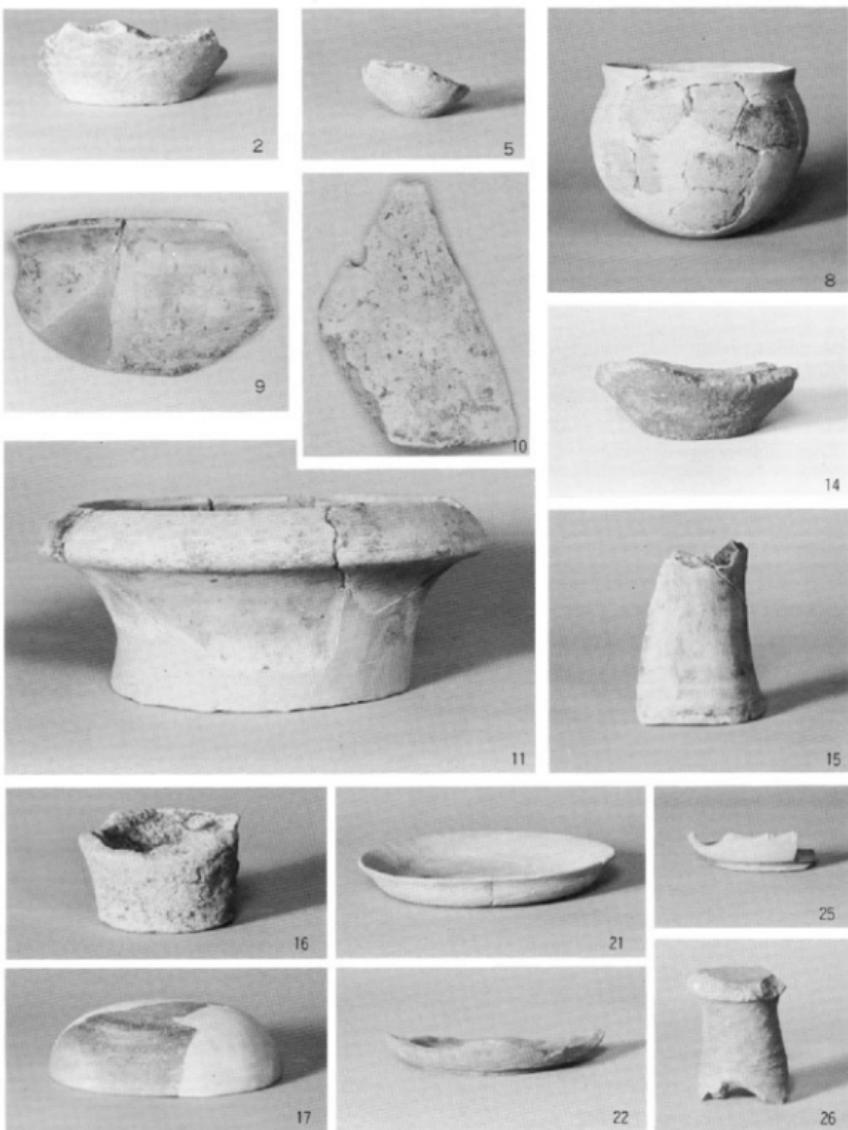


6

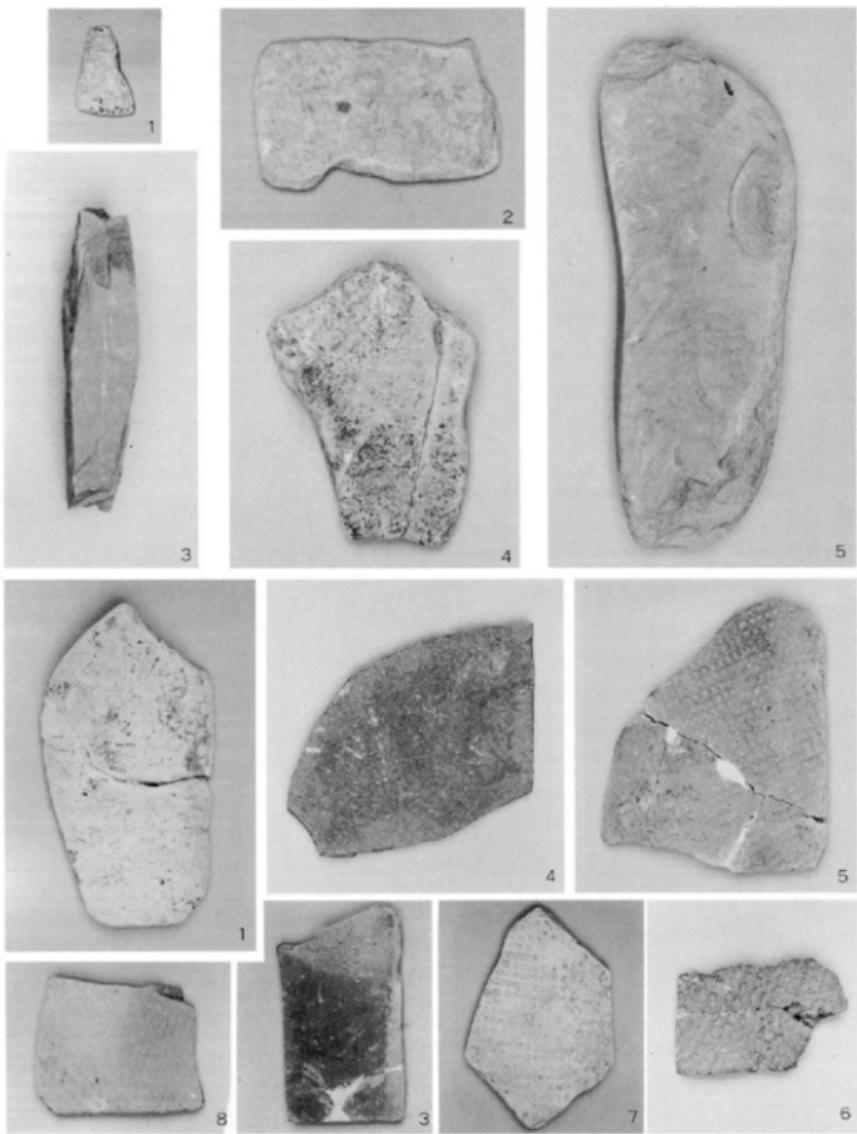
2

1

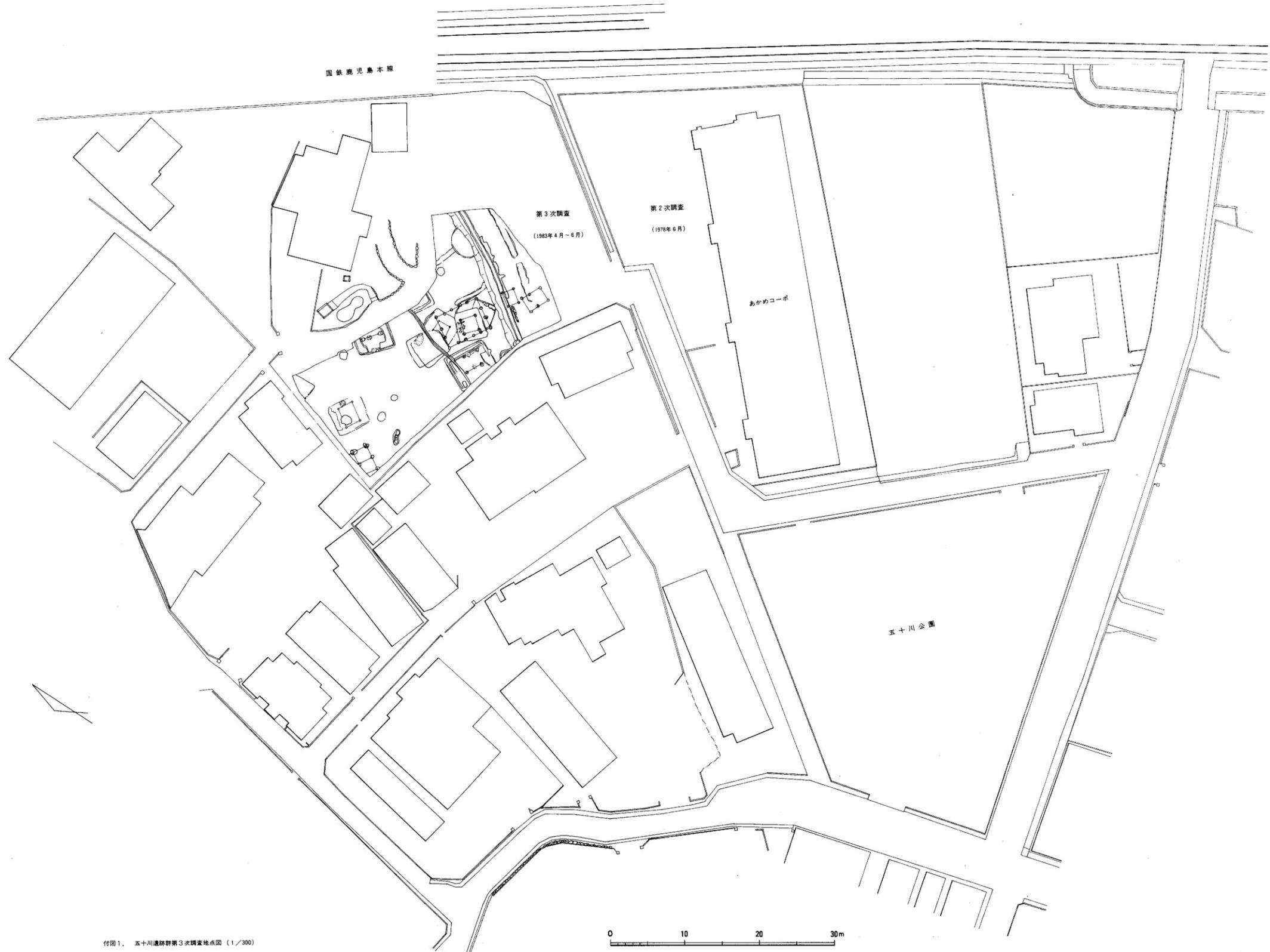
7



S D -01 • S H -04 包含層出土土器 (1 / 3)



包含层出土石器(1/2、1/3)、瓦(1/4)



福岡市中部地区埋蔵文化財調査報告

I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第111集

1984年3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 福岡印刷株式会社
